

CLA-アーカイブズ 23

2009年度基盤研究 身体知プロジェクト
研究会報告「体をひらく、言葉をひらく
——わたしたちの物語を紡ごう——」
——2009年度の身体知実験授業を振り返って——

菊住 彰 Akira Kikuzumi
菱山裕子 Yuko Hishiyama
黒沢美香 Mika Kurosawa
コーディネーター 手塚千鶴子 Chizuko Tezuka
武藤浩史 Hiroshi Muto
横山千晶 Chiaki Yokoyama

慶應義塾大学教養研究センター主催

2009 年度基盤研究 身体知プロジェクト

研究会報告「体をひらく、言葉をひらく

——わたしたちの物語を紡ごう——」

—— 2009 年度の身体知実験授業を振り返って——

2010 年 1 月 20 日(水) 18:00 ～ 20:30

慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階 大会議室にて

Program

- | | |
|---------|-----------------------------------|
| 18:00 ～ | 授業のコーディネーターによる報告
身体知研究会と実験授業紹介 |
| 19:00 ～ | 授業参加者を交えた振り返りと意見交換 |

慶應義塾大学教養研究センター基盤研究身体知プロジェクト実験授業は、「従来の大学での教育は理論的言語による知が重視され、またアート教育といえば、アート専攻の学生のための教育が主であった。この実験授業では、これまで大学教育でないがしろにされてきた身体を、積極的に発声、呼吸、ムーブメント、コラージュ、造形など多様なアート体験と表現を通過させることで、その身体をほぐし、身体と心を柔らかくつなぎ、あらたな気づきの醸成を試みる。また、それらの試みを通しての自己理解や成長をうながし、学生達が、日々の学習や生活の営みに活かせる授業をめざす。」という趣旨でスタートしたものです。

2009 年度 ゲスト講師 菊住彰（慶應義塾大学学生相談室カウンセラー）
 菱山裕子（造形作家）
 黒沢美香（ダンサー）

コーディネーター 手塚千鶴子（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター教授）
 武藤浩史（慶應義塾大学法学部教授、教養研究センター副所長）
 横山千晶（慶應義塾大学法学部教授、教養研究センター所長）

※ 2009 年度身体知実験授業当時



2009 年度初回ガイダンス 左：横山千晶氏 右：手塚千鶴子氏

体をひらく、言葉をひらく——わたしたちの物語を紡ごう

法学部教授 武藤浩史

2009年の身体知実験授業は、「体をひらく、言葉をひらく」と題され、言葉の意義が強調されている。これは、詩をメインテキストに選んで、それに様々な活動を結びつけた2008年身体知実験授業の流れを受け継いで、言語活動と身体的活動を繋げようとしたものである。これは、すでに報告書（『身体知と新しい文学教育』<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/journal/jikken08.pdf>）が出ている文学の実験授業と内容的に大きく重なるものであり、また、同時に、2010年度に正規授業化された「身体知——創造的コミュニケーションと言語力」とも共通点を広く共有する。文学テキストを用いたこの流れは慶應義塾大学教養研究センターの活動の一つの中心を形成し、今年上梓した拙著『「チャタレー夫人の恋人」と身体知』（筑摩書房）でも紹介させていただき、江湖に高い評価を頂いた。また、2009年より始まった大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」の中で、文学テキストを用いた「アーサー王ワークショップ: テニス「シャロットの女」を読んで、体感して、作ってみよう」（2010年9月6日～8日）という実験授業を実施して、好評を博した。

2009年の身体知実験授業が、それらと共に一つのグループを形成しながら特徴的なのは、臨床心理学のワークショップを大きく取り入れたことにある。振り返りの回を除けば6回にわたるセッションの内、初めの2回を用いて、慶應義塾大学学生相談室カウンセラー菊住彰氏をお招きし、自己を見つめる「対自的コミュニケーション」のワークショップと他者との関係を訓練する「対他的コミュニケーション」のワークショップを行った。

われわれコーディネイターの意図としては、まず2回の心理学系ワークショップで、対自的、対他的に心をひらいた上で、解放された状態で創造力を発揮して言語作品を作ってもらい、それからその作品を言語の外の世界に繋げることで、さらに表現力を磨いてもらうということであった。臨床心理学と言語作品創作と身体表現の世界を繋げながらそれぞれを体験してもらうことで、参加者がある種の飛躍的な経験や発見に導くことが可

能なのではないだろうか。そのための産婆役として、美術家の菱山裕子氏とダンサーの黒沢美香氏をゲストにお招きした。

この野心的試みのすべてが上手く行ったとは思っていない。しかし、大いに盛り上がったし、成功の瞬間は間違いなく存在した。この経験から、今われわれは何を捨て何を学んでゆけばいいのだろうか。その問いに答えるための報告書である。

PROFILE

むとう・ひろし 慶應義塾大学法学部教授、日本ロレンス協会会長。慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了（修士）、英国ウォリック大学大学院文学研究科博士課程修了（Ph.D.）。著書に、『「チャタレー夫人の恋人」と身体知』（筑摩書房）、『「ドラキュラ」からブンガク』（慶應義塾大学教養研究センター）、『愛と戦いのイギリス文化史 1900 - 1950 年』（共著、慶應義塾大学出版会）、フォード・マドックス・フォード『かくも悲しい話を…』（翻訳、彩流社）、D・H・ロレンス『チャタレー夫人の恋人』（翻訳、ちくま文庫）など。

研究会報告「体をひらく、言葉をひらく——わたしたちの物語を紡ごう——」 —— 2009 年度の身体知実験授業を振り返って——

手塚千鶴子（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター教授）

手塚千鶴子 こんにちは。今回は 2009 年度の特設課題研究、「身体知教育を通して行う教養言語力育成」の中のセッションⅣ「コミュニケーション」との相乗りでの身体知の実験授業になりました。身体知の実験授業はこれで 4 回目ですが、参加された皆さんと一緒に授業の振り返りを、今後に向けて実際のビデオも見ながら、そして皆さんの授業が終わって約 1 カ月たった時点での振り返りを共有しながら、研究会を進めていけたらと思います。どうぞよろしくお願いします。12 月 22 日の発表の際には、皆さんの素晴らしい演技力に支えられ、私自身、照れを乗り越えたのか、かなりはじめて楽しくやれましたが、今日はまた違う場面で多少緊張しておりますので、皆さんのご協力をよろしくお願いします。

1. 身体知実験授業の歴史

まず皆さんご存じだと思いますし、冒頭でも申し上げました通り、身体知の実験授業は今回で 4 回目です。4 回目にして初めて、文部科学省に応募してお金をいただいた大学教育推進プログラム【A】「身体知教育を通して行う教養言語力育成」という大きなプロジェクトの中の「コミュニケーション」のセッションの中の取り組みとして、実験授業を行うことになりました。

本日ここに来ていらっしゃる武藤先生、横山先生、それから熊倉先生と坂倉先生もご存じだと思いますが、まず教養研究センターの基盤研究身体知プロジェクトは 2005 年に立ち上がり、最初は先生方の間で、身体知をどうとらえて、それをどう教えていったらいいかという研究会を何回か行い、そして 2006 年度から今のような身体知実験授業をスタートさせました。

まず最初に、どうして身体知のプロジェクトを教養研究センターでやり始めたかということについてお話します。最近いろいろなところで身体論、身体知という言葉が使われることが増えてきましたが、それは教育の分野でも、それから哲学

の分野、あるいはコミュニケーションの分野でも使われるようになっていきます。そこには、大きな近代化と科学の進歩、多様なテクノロジーの進歩の末に私たちが身体から切り離され頭でっかちになり、ある部分、非常に偏った生き方をしているのではないかとという反省があります。本来、私たちが持っている身体とのつながりを失い、身体から発せられている大事なメッセージを受け止め、生活のなか、学びのなかに生かしきれていないのではないかと、ある種の危機感が共有されています。そうした反省や危機感を踏まえ、教育のあり方をふりかえり、この失われた身体とのつながりをとりもどし、それに支えられた新しい知のあり方を開拓すべく、従来の授業とは違う授業を展開してみようと、実験授業がはじまりました。

はじめの 3 年間の身体知実験授業をふりかえる

まず 2006 年度は「体をひらく、心をひらく——新しい実験授業へようこそ」として、命の基本である呼吸にはじまり、コラージュ、連句、ダンス・ムーブメントなど、身体性を伴う動きやアート体験を、瞑想呼吸法指導者、臨床心理士、ダンサー等の協力のもとで行い、体や手や心を動かしほぐし、自己の解放や気づきを育てる授業を行いました。

2007 年度は、「アートで体をひらく、心をひらく」として、臨床心理士で、表現アートセラピストのファシリテーションのもと、あるテーマについて、個人、ペア、グループで、つぎつぎに、描画、粘土、ダンス・ムーブメントのいくつかを繰り返し出し表現しながら、自分の感情や思いに触れ自己の気づきを促進する授業にとりくみました。詳しい内容についてはすでに教養研究センターの CLA アーカイブズ 13 という報告書にまとめられています。また 2007 年度の授業の一回は、カナダの王立音楽院で生まれた新しい学びのあり方を、参加者が小学 5 年生になったつもりで、会場でダンスやムーブメントをとりいれながら宇宙について学ぶ模擬授業を実践しました。そのまえには、この新しい学びのあり方、LTTA (Learning through the Arts) 「アートを通して学ぶ」、の理論的背景も勉強

強することができました。これも CLA アーカイブズ 12 にまとめられています。学びが単に頭による論理的、数学的、言語的なものだけでなく、身体や感性も動員する多様な学びがあるのだという認識にたったものです。

そして 2008 年度は、今回ご出席いただいている武藤先生がメインのコーディネーターとなり、「体をひらく 心をひらく——ボクってどこにいるの?」と題して、自分に向き合うような、パントマイムや朗読、コラージュを作るといった多様なアート表現を通して、なおかつ一番最初には非常に面白い「たわしのわたし」という現代詩を材料にして、多少文芸的、文学の授業の流れをくみながらアートや身体ムーブメントを使った授業を展開していただきました。これも CLA アーカイブズ 16 にまとめられています。

それまでの 2006 年度、2007 年度の実験授業は一回一回がワークショップになっていて、その中で多様なアートや身体表現をして、その中から学んでいく形だったんですけど、2008 年度の武藤先生のときには、最終的なアウトプットとして 1 人あるいは 2 人、あるいはグループで組んで何かプレゼンテーション、発表を行う、しかもいわゆる普通の講義でのプレゼンテーションとは違う形のことをしたわけです。

そこには即興演奏や脚本の発表、脚本に基づいたドラマ化、紙芝居などがあり、またそれらのいくつかを組み合わせるなど、バラエティゆたかでした。即興性もあるし、また十分準備されたものもありながら、そういった多様なもののコラボレーションを通しての最終アウトプットを発表する形で、非常に盛り上がった実験授業だったと思います。

これまでの 3 年間の授業の特徴をいくつか取り出すと、次のようになると思います。

第一に、教員による一方的講義、理論知識偏重の授業に対し学生が身体と心を存分につかって参加する学生参加型、あるいはワークショップ型の授業。第二に、そこでは知識やスキルの獲得というよりは、自己理解や自己への気づきを促進する心理教育的授業。第三に、それは自分とのコミュニケーションと、他者とのコミュニケーションという、対自的、対他的コミュニケーションの促進と両者の有機的なつながりをめざすコミュニケーションの授業といえます。第四に、体を動かす、体を感じる、体に聴く、体をつかうといった身体やアートに開かれた授業。第五に、従来の授業が、その構成や構造、目的が明確で、目的達成に向かい手順がかなりきっちり既定されているのに対して、身体知の授業は、ある程度の流れや構成はあるものの、むしろその授業の場にながれる気配やプロセスを相当大事にし、そのプロセスに心身をゆだねることから多くを学び取る授業です。第六に、大学生だけでなく多くの世代に開かれ、通信教育生や学校の教員たちも参加する多様な年齢と背景の参加者がいること。第七に、ワー

クショップ形式の授業で言葉以外のメディアを多用しますが、学びをたしかなものにするため、言葉による、体験やプロセスの振り返りをも大事にしていることです。第八に、この授業には、企画から授業全体の運営をフォローする「コーディネーター」と、各回の「ゲスト講師」がいて、さらにこの実験授業の「観察記録者」がいます。また彼ら全員が授業の流れと参加者を見守る役目もしています。

2. 2009 年の身体知実験授業の特色

慶應義塾大学で進める大学教育推進プログラム「身体知教育をととしての教養言語力養成」の一環として

2009 年度の身体知の実験授業は、「体をひらく、言葉をひらく——わたしたちの物語を紡ごう——<身体アート表現を介しての言葉磨きと協働力養成>」ですが、この授業には、これまでの特徴をうけつぎながら、一方でそれらと異なる特徴があるので、その点を説明したいと思います。そのまえに、まずこれが、どのような大きな教育プログラムの枠の中で展開されたのかを説明します。

それは文部科学省の平成 21 年度「大学教育・学生支援推進事業」「大学教育推進プログラム【A】」に採択された、3 年計画の慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」という大きな教育プログラムの初年度の事業の一環として、行われたということです。

この「身体知教育を通して行う教養言語力育成」という研究教育プログラムは、2007 年度に終了した文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」の次なるテーマとして、教養研究センターがハブとなって取り組む大規模なプロジェクトです。それは外国語に特化しない新しいタイプの中上級教養言語力の育成をめざします。

そのアプローチは一方通行の講義による座学ではなく、学生が主体的にとりくむ、体験・参加型の教育により、自己についてをはじめさまざまな気づきを促すもので、これまで教養研究センターで実践されてきた身体知実験授業をはじめ、さまざまな身体知教育の方法を用いる野心的な試みです。

このプロジェクトでは、学生がそこで体験する体験のタイプが、「アート」「フィールド・アクティビティ」「コミュニティ」「コミュニケーション」の 4 種類に分けられ、それぞれ具体的な教育プログラムを企画運営するセッションが一つずつ設けられています。さらにそうしたプログラムの発信、評価と全体の調整・統合をおこなうセッション V「発信・評価・システムデザイン」があり、5 つのセッションは、学部横断的、キャンパス横断的な教員により構成されています。

このセッション IV「コミュニケーション」のプログラムの

文部科学省 大学教育・学生支援推進事業
大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」実験授業

体をひらく 言葉をひらく

—わたしたちの物語を紡ごう—

～身体アート表現を介しての言葉磨きと協働力養成～

生きている私たち、一人ひとりの中に物語があります。そんな私たちの物語の共通項が、かたちを取ったのが「おとぎ話」なのかもしれません。今年で四回目を迎える教養研究センターの身体知実験授業では、私たちの身の物語を言語や非言語（身体）で紡いでみて、仲間たちと分け合い、一緒にそこから新しいことを目指します。自分と他人、言葉と言葉ではあらわせないもの、体と言葉。私たちを取り巻いて、そんな当たり前のことを、もう一度見直してみませんか？そして自分の表現力を磨きましょう。

お申込は：教養研究センターHPから応募用紙をダウンロードし、メールにてお申込下さい。なお、応募用紙は来校舎一階受付でも入手できます。応募締切り 10月24日（金） 12時 発表 10月26日（月） メールにてお知らせします

日程 いずれも18時30分より20時30分まで
 10月28日（水） ワークショップ1 対目的コミュニケーション力をみがく
 11月 4日（水） ワークショップ2 対他のコミュニケーション力をみがく
 11月11日（水） ワークショップ3 知っている物語を自分風に書き換え・作り変えてみよう
 11月25日（水） グループワークショップ1 書き換え・作り変えた物語から大きな物語を作る
 12月 2日（水） グループワークショップ2 アーティストと一緒に創作してみよう
 12月 9日（水） グループワークショップ3 アーティストと一緒に創作してみよう
 12月22日（火） 創作発表と感想会 この日のみ曜日が異なります。

実施場所 日吉キャンパス 来住舎1F シンポジウムスペース
コーディネーター 手塚千鶴子（日本語・日本文化教育センター）、武蔵浩史（法学部）、横山千晶（法学部）
講師 菊住 彰（学生相談室カウンセラー）
 斎山裕子（国際センター非常勤講師・アーティスト）
 黒沢美香（ダンサー）
協力者 熊倉敬聡（理工学部）、高山 緑（理工学部）
留意事項 この実験授業は課外授業であり、単位にはなりません。応募者多数の場合、書類選考させていただきます。授業の様子を収録させていただきますので、ご了承ください。

主催／問合せ先 慶應義塾大学教養研究センター TEL：045-566-1151 E-MAIL：tolanase-lib@edst.keio.ac.jp

一つとして、セクションI「アート」とも連携して実施されたのが、「体をひらく、言葉をひらく——わたしたちの物語を紡ごう」です。

このセクションIV「コミュニケーション」のめざすものは、アート・オブ・コミュニケーション（「交流の技術」と「交流のための芸術」の二つの意味）をキーワードに、造形芸術の力と臨床心理学の識見をドッキングさせ、自己についてのコミュニケーションの学習を通し、芸術言語力や、学術言語力、そして協働力を養成することです。初年度である2009年度のこの授業では、教養言語力のうち、芸術言語力と協働力の養成が中心となりました。

さて教養言語力とは

教養言語力とは、造語ですが、狭い外国語運用能力に特化されない、人間が、現代を生きるのにふさわしい新たな知や学びを創発していく歩みを支える幅拾い語力であり、互いに関連し刺激しあう三つの言語力から主に構成されています。言語を創造的に駆使する「芸術言語力」、選んだテーマを十分に調査して論文にまとめる「学術言語力」、さまざま

なメディアを用いて社会に発信する「メディア言語力」です。

2009年度の授業の趣旨とは

今回の授業の趣旨はつぎようになります。

身体にフォーカスした臨床心理学的な自己の内面の気づきや自己表現をうながすワークショップからはじめ、既存の好きなあるいは気になる物語を、言語、非言語の多様な身体アート表現を用いて書き換え、作り変えという、言語と非言語（身体知）の実り豊かな交流を通じた創作活動とその発表にとりくむ。創作と発表はグループ毎に行い、この授業の全過程を通して、言語、非言語媒体をもちいた振り返りを効果的にとり入れる。これらの活動を通して、参加者の気づきや成長を育みつつ、表現および自己相対化の言語力を磨き、協働力を養成する。

ここでの振り返りとは毎回、皆さんにしつこくお願いしていたポートフォリオの記入や、ことばによるみなさんとの振り返りを指して、これらの活動を通して参加者の気づきや成

長をはぐくみつつ、表現および自己相対化の言語力を磨き協働力を養成するということです。

その次に授業の特徴として、本日の資料1の授業の特徴を見てください。

まず(1)、臨床心理学的アプローチと芸術活動をミックスさせるということですが、皆さん参加された方は1回目、2回目のワークショップが、その後のグループで皆さんがやっていく芸術創作活動と、お互いにうまくつながり合って相乗効果を上げていけばいいかなと思います。

次に(2)、コミュニケーション学習としてのセッションIVと

資料1：身体知実験授業の授業の特徴

(1) 方法に、臨床心理学アプローチと芸術活動（身体や造形芸術を通しての）をミックスさせ、かつまた学生参加型のワークショップ授業として展開させる。

(2) コミュニケーション学習としてのセッションIV：自分のなかでの対自的コミュニケーションからはじまり、他者やグループとの対他的コミュニケーションの学びへ、さらにそれがグループでの創作活動の促進と良質のアウトプット創造へつながり、またその創作過程を通してのさらなるコミュニケーションの学びへとつながることを意図する。

>>一回、二回の対自的、対他的コミュニケーションの学び

(3) 臨床心理学的アプローチをコミュニケーション学習に融合：

ワークショップ形式のコミュニケーション学習には、安心して信頼できる場の生成や、その場でのグループプロセスが参加者の学習促進的に展開するような見守りとモニタリング、また参加者と講師、コーディネーター間での振り返りを重視する。

>>臨床心理学的知見にもとづく観察と振り返りを適宜取り入れる。ポートフォリオの作成と記入、観察者、ビデオ等の記録

(4) こうした構成により、学生たちの自己の内面への気づきや自己理解をも高める自己についてのコミュニケーション学習。

(5) 方法？としての芸術創作活動：

身体とアートをもちいた芸術創作活動を取りこむ。しかしそれ自体が喜びでもある表現活動。

ということでは、これは対自的、自分に向かったときのコミュニケーションと、対他的、他者との間のコミュニケーション、その2つがありますよということと、そこからグループでの創作活動、さらに実際のアウトプットへつなげ、それら全体を通して、またコミュニケーションの学びにつながっていけばいいかなということです。

同じく資料1の(3)のところもだいたい今申し上げたようなことと重なるんですが、ここの授業では先ほど申し上げたようにポートフォリオを作りまして記入していただき、また高山先生なんかにも入っていただきましたが、観察していただいてビデオ等の記録を取っております。皆さんの授業の後でコーディネーターと高山先生たちとでちょっと振り返りをしたりして、次の授業に備えるという形を取っていました。

そして資料1の(4)ですが、そういうことにつながりの中で、皆さん、参加者の内面の気づきとか自己理解というものが進んでくださればいいかなということですね。芸術創作活動が1つの方法にもなっているんですが、ある意味で、それ自身が皆さんも経験されたように非常に楽しい活動になっていたのではないかと思います。

次に、資料2の従来の身体知の授業とくらべて、またそれとのつながりですが、今までは、やはり身体に開かれる、身体をほぐすということ。あるいは身体からのメッセージに敏感になるという意味で身体の方に力がはいつていました。もちろん言葉での振り返りもやりましたが、今回は、語力の養成、教養言語力の養成ということなので、言葉の力を磨くという意味も含めて物語の書き換えなど、言葉の比重がかなり多くなっていることです。それから3回目からグループをつくりましたが、グループでの創作活動ということで最終的に発表へということですね。これまでの3回の身体知実験授業と

資料2：従来の身体知の授業とくらべて、またそれとのつながり

(1) 語力養成の比重がたかい

>>物語の書き換え、作り替え、最終的創作発表における言葉の比重

(2) グループによる創作活動を導入し、創作作品を作り上げ、発表する。

(3) 基本においては、これまでの身体知の授業の基礎のうえでのバリエーションであり、つながっている。文学文藝の要素のつよい2008年度の授業の延長上にある。

割合とスムーズにつながっていきながら、そのバリエーションという形で行われたかなという感じです。

次に資料3の実際の授業をふりかえるですけれども、DVDを見ながら少し振り返ってみたいと思います。それで大きく分けると段階が1、2、3、4とあると思いますが、1は2回のワークショップがあるという段階ですね。段階2になると個人で物語の書き換えをしていただいて発表してどれがよさそうかなということでグループがつくられて、グループでの活動が始まるという段階。段階3で、そこに自分たちでいろいろなアイデアを練っていく過程において、アーティストがお2人入っていただいて、造形作家の菱山先生とダンサーの黒沢美香さんに入っていたいて、コンサルタントみたいな形で協力していただき、段階4として発表になったと思います。

それでは今、ご紹介した内容と少し重なりますが、具体的に2009年度の授業内容を振り返りましょう。

2009 年度実験授業を振り返る

第1回目 10月28日 ワークショップ1

対自的コミュニケーション力をみがく

この授業の趣旨・目的、これまでの身体知実験授業と比較しての今回の特徴、授業の進め方の簡単なオリエンテーションの後、菊住彰先生によるワークショップ。コーディネーターもみなと一緒に参加。「五感に意識をむける」というテーマで、大学ではあまりやらない身体をほぐし開き、自分の感じる感覚に意識を向けそっと受けとめ味わうことで右脳を働かせ、感覚をみがき、今後の物語作りやグループでの協働作業のもとになる、自分の感情に気づき受け止める自分との対話、対自的コミュニケーションの基礎をまなぶエクササイズを行う。

まずはグループで椅子に腰掛け、「使われなかったマッチ棒」「笑うこけし」「○○の松ノ木」など、自分を何かに例えた自己紹介から緊張をほぐし、椅子に座り呼吸して体の緊張と弛緩を経験し隣の人の肩甲骨に手をあてがいながら体温に

資料3：実際の授業をふりかえるーDVDをみながら

大きな枠組と各回の概要

段階1：二つの臨床心理的な視点からの身体知的ワークショップ

対自的レベルのコミュニケーション力としての身体的気づきを育むボディワークのWS（ワークショップ）と、対他的レベルでのコミュニケーション力としてのアサーション的要素のある自己表現力を育むWSにより、身体感受性を高め創造性をうながし、また次のグループでの芸術創作活動のために必要なコミュニケーション力をつける。

1回目 10月28日 イン트로と対自的コミュニケーション

2回目 11月4日 対他的コミュニケーション+次の回への準備（講師：二回とも菊住彰）

段階2：グループをつくり、好きなあるいは気にいった既存の物語（童話、民話など）の書き換え、作り変えのための骨組みづくり

言葉で書かれた物語を、言葉での書き換えおよび、他の非言語媒体（身体ムーブメントやダンス、背景や衣装、小道具等の造形活動、音楽）を用いての作り変えのための骨子を作る。

3回目 11月11日 個人の書き換えの発表とグループ結成

（11月18日 グループでの自主活動）

4回目 11月25日 グループでの大きな物語創作へ、大枠をねる

段階3：グループ毎に、脚本や絵コンテをどだいに肉付けをし、創作活動を完成へ

自分たちの考えを軸に、コンサルタントとして参加するダンサーや造形作家の力を借り、案をねりあげ試行錯誤をかさね、創作を完成へ。

5回目 12月2日 造形作家を迎えて協力を仰ぐ（講師：菱山裕子）

6回目 12月9日 ダンサーとともに動いて各グループの課題にとりくむ（講師：黒沢美香）

（12月16日 グループでの自主活動）

段階4：グループ毎の発表と感想

7回目 12月22日

意識を向けるなどをした後、ペアを組み、目隠しをされた一人が、同じ方向をむいている相手の肩に片手を預け、もう一方の手をその相手にひいてもらいながら、会場内とその外のスペースを案内し、ひいてもらっている手にいろんなもの、壁、事務室の職員、植木、ドア、椅子、机、トイレのシンクなどに触らせてもらうブラインドウォークを行う。交互に役割を交代するが、皆は楽しそうにあちこち遠征して会場にもどり、ものや人に触る触角や、外にでて肌で風の動きや日向を感じる体験をする。感想をいいあい、さらに4種類の紙コップの脱脂綿にしみこんでいる匂いを嗅いで、イメージをふくらませる嗅覚の体験をする。感覚に意識をむけると自分のなかにさまざまな記憶のイメージたとえば、「おばあちゃんの家」などがうかび、それによって自分のイメージや気持ちがうかびあがってくることを学んだ。最後にお互いの感想をいいあう時間を共有する。

第2回目 11月4日 ワークショップ2 対他のコミュニケーション力をみがく

ひきつづき二回目も菊住先生によるワークショップ。コーディネーターもみなと一緒に参加。体の感じに意識を向けることで自分の感情にきづくという先回のテーマをふまえ、まずは先回取りこぼしていた聴覚を使い、三種類の音、そこには人の声や鐘など多様なバリエーションがふくまれる、を聞き、イメージをふくらませる。このイメージが自分の感情への気づきの助けになるという。次に、そうした対自的コミュニケーションに対して、自分の捉えた感覚や思いをどう相手につたえ、また相手の感覚や思いをどう受けとめ理解するか対他のコミュニケーションの基礎を学ぶ。知らないものどうしてペアをくみ、横並びにすわり、相手に視線をむけずに、左手を差し出し、相手が手首から少しづつ指を腕の方にはわせていき、ひじの折り目に来たと思ったら、触れられている方が合図を



第1回 隣の人の肩甲骨に手をあてる



第1回 ブラインドウォーク

し、実際にまだひじまで達していないのに、達していると感じる人や、逆に達しているのに、まだと思うなど、人の体の感覚でのコミュニケーションにもズレがある。さらにペアで、向き合って座り、互いに見つめあうことをやり、同じペアで、次には、見つめあう時に相手の黒目のなかに自分が映っているのを探すことの二種類を行った。はじめのときには笑う人が多いが、次のときにはほとんど笑わない人が多く、人は他者が自分を見てると意識すると緊張するが、自分を他者の目のなかに見つけようと見つめるときには緊張をしないことを学ぶ。こうしたまなざしのレベルのコミュニケーションに対し、言葉のやりとりのレベルでの他者とのコミュニケーションにおいて大事な、カウンセリングでいう相手のいったことを相手に照らし返すことの重要性を、照らし返されることで、自分の本当の気持ちに気づく、何回もの照らし返しにより、自分の本当の気持ちに近づいていくことなのだと、互いに相手のいうことを聞いてうけとめるエクササイズをする。さらにその際、言葉を発せずに口をばくばくさせ、つまり目の力や表情で「おにぎり」や「やさそば」という言葉を伝え、伝わったかどうかを互いにやってみる。

さらに、「楽しかった話」や、「むかついた話」をそれぞれ、お互いに言葉で伝える練習をして、自分の好き嫌いや感情にとらわれず、相手の思いを、相手の言葉を、貴方がそう感じている、考えているのですねとそのままに受けとめ、伝える重要性を学ぶ。

終わりに、横山先生、武藤先生から次回にむけ、各参加者が、好きなあるいは気になる物語を書き換え、各自のアイデアを全員のまえて発表するため、物語を動かすふくらませるために重要なポイント、例えば事件に巻き込まれこととゴール、邪魔するものと助けるものなどによるドラマの生成、物語の脇役に焦点をあてるなどのポイントの説明をし、サンプルを学生に配布。『赤ずきんちゃん』を狩人の視点から展開させた詩のような『しずかな湖』とそれへの返歌『わたしは底です』や、『荒れている、愛している——桃と赤ずきんさんと桃太郎、あるいは、愛し合う鬼と狼』というタイトルの各章のシノプシスが配布された。

第3回目 11月11日 ワークショップ3 知っている物語を自分風に変えてみよう

参加者全員に発表してもらうため、ひとり3分間で、簡単に内容の説明や意図、元になる物語が何かを発表する。人によっては書き替えた物語そのものを時間一杯読みあげるものもある。はじめからオリジナルに制作したものもある。数例をあげると『泣いた赤鬼 どこまでも君のともだち』、『しろうさぎのほやき』、『フランケン駿太』、『白雪姫の日記』『赤ずきんちゃん気をつけて』、『強襲』『ちくしょう大歌舞伎金太郎』、



第2回 相手の目に自分は写っているか

資料4：第2回で第3回（11月11日）の授業用に配布された創作サンプル その1
（実験授業コーディネーター、法学部教授 横山千晶）

「赤ずきん」より。目立たない登場人物の狩人さんに焦点を絞って見ました。

1. おとぎ話の脇役に焦点を絞ってみる
2. 物語を複層的にとらえてみる
3. その人の目から他の登場人物（動物）の物語まで広げられる創作にしてみる
4. （これは良く私たちがやりがちだが）おとぎ話の「大人読み」をしてみる

資料5：第2回で第3回（11月11日）の授業用に配布された創作サンプル その2

（実験授業コーディネーター、法学部教授 武藤浩史）

1. 冒頭二回の授業と繋げるために→今のあなたの気分は？ 他の人に対する気持ちは？→そこからテーマや設定を考えてみる。

2. 物語を動かすには ①主人公と登場人物

②事件に巻き込まれることとゴール（欲望）→動き

③邪魔するものと助けるもの→ドラマ ④結末

たとえば、①赤ずきんさんと桃と桃太郎、犬、雉、猿、狼、鬼、朝野^{そよかぜ}微風さん ②日本犬からおでんをご馳走されて、一度本物のおでんを食べてみたいと欲望する、あるいは世界一美しいタコの発見を欲望する→動き

③意外に意地悪な犬、雉、猿と意外に親切な鬼

3. その他ヒント

①描写…具体的なこととあり得ないこと（平穏な状況と事件）を対比させてみる——日吉駅10時14分発の渋谷行き急行電車がするするとホームに入ってくる、いつまで経っても電車が渋谷に着かない、いつの間にか中目黒が終点の世界に変わってきた。

②モチーフやテーマ：矛盾してそうだけれども本当なこと——Aを失うことでBを得る、Cを得ることでDを見失ってしまう。

『荒れている、愛している——桃と赤ずきんさんと桃太郎、あるいは、愛し合う鬼と狼』

第一章 赤ずきんさんが桃に食べられた

11月某日、清冽な朝でした。日吉駅前の普通部通りをずっと行くと、道が谷を下っていて、狸やら狐やら蜚やらがうじゃうじゃ動きまわっています。そこを過ぎると右側に太古の古墳があって、古い人たちの骨がいっぱいいっぱい埋まっています。それが赤ずきんさんのお散歩コースでした。

ある夜、雨がしゃあしゃあ降りました。水が大いに地面に吸い取られました。その翌日のことです。赤ずきんさんがお散歩をしていると、日吉の森公園と呼ばれる太古の古墳の頂から、突然、桃が転げ落ちてきました。桃は草を倒し、木を倒し、公演の柵を倒し、坂道を転げ落ちながら、どんどん重力エネルギーを吸収してゆきました。古墳の麓にあるお寺の裏木戸を倒し、敷石を覆し、本堂に侵入すると、蠟燭を倒し、座布団をべたんこにし、木魚をひっくり返し、本尊にぶつか

ると、本尊を倒しながら、スピードをどんどん増して、本堂の階段を駆け下り、正面の門を倒すと、犬を連れて門前を歩いていた赤ずきんさんの側面に襲いかかりました。

しゅぽっ。

赤ずきんさんが桃に食べられた。おばあさんもおじいさんも、鬼も狼も、猿も雉も犬も気づかない内に、狼に食べられるはずだったあの赤ずきんさんが桃に食べられた。

どういうことでしょうか。

そこで、桃に食べられてしまった赤ずきんさんは、桃の中の桃色の光景のあまりの美しさ、かぐわしさに酔いしれて、それがどんな結果をもたらすかを何も考えずに、桃の中から桃を食べていったのですが、結構嬉しかったようです。桃が赤ずきんさんを食べると同時に赤ずきんさんが桃を食べているという、相思相愛、合体相食の関係が築かれたわけですが、駆り立てられる欲望の形として、これがいいのか悪いのか。

大騒動のただなかで、桃の中にいたはずの、桃から跳び出すはずだった桃太郎は、タイミングを逸して、引きこもりました。桃の中をいくら探しても、見つかりません。現在、行方不明です。

行方不明のまま、現在、疾走中です。引きこもっていますけど。

第二章 鬼が狼と会談する——愛し合う二匹

角が便利化牙が便利化、あるいは格闘について。トラの毛皮化かピンとたったひげか。

元住吉 さかなマーケット 二人とも魚が好き 煙が嫌い 我慢する。遠慮なくなる、角が便利か牙が便利か 喧嘩 互いに傷つける（どこをどんな風に？）

武器も傷ついてしまう 威張りあいを止める 譲り合い 褒め合い 赤ずきんさんは威張るから嫌い 桃太郎を探しにゆこう ゆこう ゆこう

第三章 犬、雉、猿の間で、異種婚——さわやかな三角関係

11月吉日 武蔵小杉 精養軒ホテル

第四章 愛と思いやりが支配する赤ずきんさん帝国

赤ずきんさんを食べた桃でしたが、食べられた桃の中でもがく内に赤ずきんさんは桃の中で引きこもっていた桃太郎を発見。桃太郎は、ある種の、桃太郎という与えられた役割を拒否。

ももも太郎。赤ずきんさんから頸椎のずれを正してもらう ポコベキパショッ。愛と思いやりが支配する赤ずきんさん帝国の番頭に ありがとうありがとうありがとうと唱えている内に赤ずきんさんは死んでしまいました。取り返しの付かないことになって、ちょっと残念。

第五章 朝野^{そよかぜ}微風さん 散歩 喫煙 傾聴 むき出しのざわめき

第六章 赤ずきんさんは狼に食べられたかったのに

第七章 不死のおばあさん

第八章 宝は外にある

第九章 鬼がいかにして生きがいを見出したか

第十章 「ほい、桃、持ってきた、ね、桃太郎の桃だよ」

資料6：第3回（11月11日） 創作作品
（参加者 新井由紀子）「赤ずきん」より

「赤ずきんちゃん気をつけて」

桃 食い破って赤ずきん
這いはいしながら 森へ向かう
はいはい、道草食わないで
ママの言葉も馬耳東風

赤ずきんちゃん きをつけて
あそこできつねえが 見つめてる
赤ずきんちゃん きをつけて
木の上、おっフクロウの目が光る
かわいい私の赤ずきん 森には獣がいっぱいだ

あんよがジョーズな 赤ずきん
トコトコ進む森の中
おさるが一匹やってきて
バスケットのビスけっと ひとつ私に下さいな
あ〜げましょう あげましょう
カツをひとつ あげました
赤ずきんちゃん きをつけて

資料7：第3回（11月11日） 作品
（参加者 森崎美希）「不思議の国のアリス」より

「アリスの王国」

第0章 17歳のありすは誰にも気も引かない

第1章 ウサギに追いついたありすはまんまとつまみ食いされる

第2章 甘ったるい涙の海でありすは得意の背泳ぎを披露する

第3章 旗の前に立てないありすは他人の記録を計測する

第4章 ありすを狙う刺客のトカゲは期せずして浮気相手となる

第5章 子供嫌いのありすは醜い赤ん坊を（誤って）地面に落とす

第6章 午後の紅茶はありすを持て余して時計を進める

第7章 動物をいたぶる競技に本領を発揮する嗜虐的なありす

第8章 ありすはニセウミガメの講義を居眠りしながら聞く

第9章 ロブスターが美味しいレストランでありすは炭酸水ばかりが進む

第10章 ありすは口元にタルトのくずをつけたまま空とぼける

第11章 威風堂々たる証人尋問で人生の墓穴を掘るありす

第12章 ありすの目覚まし時計は永遠に鳴り続ける

資料8：第3回（11月11日） 創作作品
（参加者 牛込宝之）「フランケンシュタイン」より

「フランケン駿太」

主人公：フランケン駿太くん

登場人物：フランケン駿太くん・右手ちゃん・左手氏・右足くん・左足ちゃん・胴体さん・頭部くん

「ぼくはどこにいるの？」

フランケン駿太くんはずっと悩んでいます。

いつから？

生まれたときから。

右手ちゃんが言います。

「なんでいつもあたしばっかり働かなきゃいけない

の！ 左手ずるーい！」

左手氏が言います。

「そんなこと言ったら、オレたちなんかいとも重たい荷物背負ってるんだぜ。そうだよね、左足ちゃん？」
「…」

しかとされたようです。

胴体さんが言います。

「人を邪険にするなんてひどいじゃない。心臓を握ってるのは私よ！」

頭部君が言います。

「だが脳は俺のものだ」

こんな状態では駿太くんの居場所はありません。

それぞれの部位にはそれぞれの人格があるからです。

でも、駿太くんはいます。

確かに駿太くんはいるのです。

それなのに駿太くんは自分が自分のどこにあるのかわかりません。

生きている気がしないのです。

ところが、ときどき自分を見かけることがあるような気がします。

どのようなときなのでしょう。

駿太くんにもそれがいつなのかははっきりとはわかりません。

けれども、駿太くんが自分を実感できる場所は、どうも駿太くんの身体にはないようです。

自分の身体でないのなら、どこなのでしょう。

どうやらそれは自分ではない別のだれかの身体のようにです。

だれかと触れ合っているとき、たとえばだれかを抱きしめたり、だれかに抱きしめられたりするときに、その人の中に駿太くんは自分を実感できるのです。

資料9：第3回（11月11日）創作作品

（参加者 小川悟）「泣いた赤鬼」より

「笑う赤鬼」

赤鬼が歩いた跡は黒くなります。

綺麗な黒です。

草も花も段ボールもすべて

のっぺらとした黒の一部となります。

これは生まれつきで

赤鬼も最早気にすることはありません。

赤鬼は青鬼と仲良しです。

しょっちゅう手紙を書きます。

誕生日には花を贈ります。

ときにはげんこつで喧嘩して

何日も顔を合わせないこともあります。

そんなときは青鬼と作った秘密の基地に行きます。

見慣れた顔が待っています。

赤鬼には悩みがあります。

山の麓に暮らしている人間達と仲良くなりたいのですが、

赤鬼が近づくとみんな逃げまどい、ちっとも友達になれません。

人間と仲の良い青鬼が仲を取り持とうとしましたがうまくいきません。



第3回 リクルート活動のようなグループ分けとアイデア発表

悲しみにくれていた赤鬼でしたが、ある日いい考えを思いつきました。

押し入れからペンキを取り出した赤鬼は全身を青く染めました。

青鬼になりすましてでも人間と近づきたかったのです。

少しドキドキしながらも

期待に胸を膨らませながら青鬼は人間達の住む村に近づいていきました。

人間達が笑顔で近づいてきます。

しかし近くまでくるとみんな

赤鬼のはるか後ろを指差し、血相を変えて逃げてしまいます。

後ろに何かあるのでしょうか？

赤鬼が振り返ってみるとそこには自分の足跡がありました。

赤鬼は笑いました。

『かぐや姫』、『笑った赤鬼』などバラエティゆたかである。

その後、自分から率先して自分の作品をやりたいものがこの指とまれ方式で宣伝やリクルートをくりひろげ、一方興味をもった作品に作者から説明を求めたり、面白そうな人と話してみたり、会場をみなが自由にまわり、あちこちに固まりができ、さまざまな駆け引きや交渉のすえ、4グループが誕生。その間、コーディネーターは、参加者の間をまわりグループ誕生をサポート。うまれたのは『あかずきんちゃん気をつけて』『母親のまなざし』『ちくしょう大歌舞伎』『泣いた赤鬼』の4グループ。

最後に、その4グループと構成メンバーが紹介される。さらに次回の課題は、各グループが、物語の大筋骨組みを決めていくことであること、さらに最終授業でのグループでの発表にむけ、今後の授業等の段取りを、コーディネーターより再度確認。

第4回目 11月25日 グループワークショップ 書き換え・作り変えた物語から大きな物語をつくる

会場に、各グループごとで集まり、それぞれ発案者から物語のねらいやめざすもの、ストーリー展開、登場人物などをふくめた、物語の構造と展開について話をする。すでになんか決まっているところもあれば、あらためてみんなの意見を取り入れ修正するグループ、音楽や小道具をどうとりいれるかつぎにアイデアが湧いて賑やかなグループなど、物語を演じていくうえで言葉だけでなくさまざまな要素の話しはじまっている。衣装や小道具に使える布や、さまざまな材料なども、



第4回 白板を使い動きを考える「ちくしょう大歌舞伎」



第4回 色紙に言葉を書く、集める「あかずきんちゃん気をつけて」



第5回 菱山先生と演出や衣装の相談「あかずきんちゃん気をつけて」

適宜、横山先生より提供される。

コーディネーターの三人とも、『母親のまなざし』で配役をふりあてられていたが、そのグループだけでなく、他のグループの議論の進み具合も確認しながら、グループをまわる。最後に、5回と6回目の二人のアーティストのゲスト講師からのコンサルテーションを、それぞれのグループでの物語りの完成にむけてうまく活用できるよう、準備してくるよう伝える。

第5回目 12月2日

アーティストと一緒に創作してみよう その1

造形作家である菱山裕子先生による各グループとの個別の、造形(小道具、衣装、背景等)のコンサルテーション。グループにより物語りのテーマとの関連で、音楽や小道具、大道具、衣装、などをどの程度、上演にとりいれたいのか、登場人物のせりふなど言葉の生かし方や位置づけ、さらに、肝心の脚本の進捗具合も異なるため、各グループを菱山先生がまわり、制作の意図や趣旨、話の展開の説明をきいたあと、質問や要望にこたえる形での授業。すでにストーリー展開から体の動き、小道具までかなりアイデアがかたまっているグループや、せりふをどうするかが、近々の最重要課題で、小道具、衣装についてまだ十分考えが決まっていないグループなどさまざまである。そこで折角のコンサルテーションを、十分いかしきれたかどうかはグループにより違う。ストーリー展開や台詞回しにこの時間をかける、あるいはかなりの動きを、実際に体を動かして楽しくやっているグループもあった。また劇のなかでつかう、小道具ともいえる、色紙にさまざまなメッセージを書き込んでいるグループもあった。そんななか『泣いた赤鬼』のグループでは、赤鬼をどう表現するかで、ひょう柄の衣装の話や、当日用意されていた金髪、白髪、茶色のヘアウィッグをかぶってみたり、紫色のハイヒール一對を角がわりに頭にのせるといった提案などがされ、さらに赤鬼が暴力的になるシーンをどう演じるかといった話もでる。

最後に次回は、ダンサーである黒沢美香さんに、ダンスや身体の動きをどうとりいれるかについて、ワークショップ形式での授業となるので、動きやすい服装で来るようにと、また何についてどんな知恵がほしいのかを、各グループごとに準備するよう、また買う必要のある、小道具としてつかうものがあれば、コーディネーターに連絡をとるようにと伝える。

第6回目 12月9日

アーティストと一緒に創作してみよう その2

黒沢美香先生によるワークショップで、各グループが物語を身体化して演じる際の、言葉だけの物語に、非言語の部分、身体の動きをどうとりいれたらよいのか、その困難や課題を、クラス全員で、実際に体をつかって動いてみながら解決法を



第6回 冷たいまなざしで母の前を歩く『母親のまなざし』



第6回 黒沢先生と相談真っ最中『泣いた赤鬼』

さぐる。例えば『母親のまなざし』のグループでは、息子や娘が母のそばを通り過ぎるときの母へのつめたさをどう歩いてどう表現するかという課題に、実際に、母親役(手塚)の前を一人ひとりが、歩いて実演し、やってみての感想や黒沢先生のコメントを共有しつつ、表現への抽象性と具体性のバランスをはかりながらよい方法を試みる。『赤ずきんちゃん気をつけて』では、桃から生まれようとする赤ずきんが、希望にみちているわけではないがおそろおそろここから出て行かなければと、内面の促しもありながら、腐りそうになっている桃を喰い破り、出て行くさまをどう表現するのかという課題がだされる。黒沢先生とグループとのやりとりのなかで、当初の考えが変化して、長い緑や赤の布を実際に使って、みなでそれにかみあい、くんずほぐれつしながら、ダイナミックな動きがうまれる。『ちくしょう大歌舞伎 末広がり うさぎの戯れ』では、グループでの全員が、お互いに隣どうしにねそべりあって人が一人寝ているさまを作るのだが、そのやり方がいまひとつということ、これまた実際に、その場でいろんな風に寝そべり体の位置を変える試みをやり、良い形に落ち着く。『泣いた赤鬼』では、人間たちが赤鬼を襲う場面で、その襲撃をどう表現するのかを同じように考えた。

第6回 徐々に発表の演出ができてくる



「赤ずきんちゃん気をつけて」



「ちくしょう大歌舞伎」



「ちくしょう大歌舞伎」

武藤先生によれば、「はじめに言葉があって心理をあらわそうとするのが演劇であるのに対し、体の動きから何かが生じて心理が描かれるのがダンス」という説明どおりの黒沢先生の指導である。各グループの目指しているものやストーリーを聞きながら、具体的な動きの提案をみなに動いてもらいながら、引き出すセッションである。演じることの照れの克服など、そのほかの発表をまえにしての不安をふくめ課題についてもみなで、議論していく時間となった。

（グループ毎の自主的な準備） 12月16日

かなりの緊張感を持ちながら、グループが自主的に集まり最後の準備に余念がない。グループによっては、照明や音楽など、夜の10時近くまで練習を繰り返すグループもあり、すべてのグループが、会場の下見と多少のリハーサルに追われ、不安と興奮とが交ぜである。コーディネーターたちも時間の取れる限りともに準備に参加、また各グループの準備具合を確認する。

第7回目 12月22日 創作発表と感想会

参加者プラス教員や、この授業の参加経験者、外部からの訪問者など幅拾いオーディエンスをふくめての、授業の成果である創作発表会と、感想会・懇親会をかねた授業。昔話、童話など既存の物語をベースに各自でつむぎ書き換えられた物語を、グループでふくらませ、さらに小道具や衣装、音楽、ダンスや身体の動きなど、非言語的要素を取り入れた各作品が、つぎつぎと約20分間で上演される。幅輻的な意味のおりなす豊かなストーリーが、ナレーションの使い方、舞台背景のあしらい、赤や緑の長い布や棒の使いかた、千代紙に書かれた言葉のはしはし、音楽や照明の使い方、創作されたダンスや見得、ふりなど身体的ムーブメント、即興性の比重など、どれ一つをとっても、グループごとの個性が輝く工夫に満ちた作品の発表であった。コーディネーターたちもそれぞれの役を受け持ち、横山先生はビデオ撮影をすすめる進行役をつとめながら、武藤先生とともに二役三役のまさに大活躍。発表作品それぞれに喝采と興奮が渦巻いて、熱気に包まれた。

各グループの発表内容

発表1 赤ずきんちゃん気をつけて

一番目は、『赤ずきんちゃん気をつけて』である。緑と赤のそれぞれ8メートルほどもある長い布をたくみに舞台上で、登場人物たちからませて、主役の赤ずきんを多数の人物が演じる舞台展開の面白さのなか、『赤ずきんちゃん』『桃太郎』『泣いた赤鬼』を融合したかのような、桃からうまれた赤ずきんの冒険と変容の物語である。まだ幼い赤ずきんは、「あんよは上手、ころぶはおいた」の言葉におくられ冒険にでるが、もはや桃にもどれない不安を感じながらも、「花つむ川原で泣いた赤

鬼やっつけて得意満面赤ずきん」となり角まではえてくる、そんな成長譚でもある。そして「狼なんかたべちゃうぞ」というのである。

配役：一人が多数の役を担当するため、他のグループからの賛助出演もあり。赤頭巾は複数の参加者が劇の進行により演じわけるという趣向。他にナレーター、猿など。

大道具：赤の幅広く長さ8メートルぐらいの布と、短い肩にはおるマント風の赤い布を多用。場面により赤ずきん、桃、胎内、森、暴力や葛藤などを示す。照明が暗くなると赤ずきん役の交代を隠す暗幕としてもつかわれる緑の布も登場。

小道具：途中から舞台に撒かれる言葉やメッセージの書かれた色紙が個性的。

1. 桃喰いやぶって赤ずきん 這いはいしながら森へ向かう
離れて横に並んだ椅子と椅子の間にはられたような二枚の赤い布の裏から、最初の赤ずきんの拳が上がり、音のひびくなか、赤いショートマントのような布を背中にしよった赤ずきんあらわれる。「喰い破れ」「桃は腐っている」「がぶがぶ」「うまそうな血の匂い」とあおられ迎えられる。次に「赤ずきんちゃん気をつけて」のナレーションとともに暗転。



2. かわいい私の赤ずきん、森には獣がいっぱいだ

今度は武藤先生の赤い布を身にまとった赤ずきん、赤い布に翻弄され、巻かれる、馬乗りになられ、のたうちまわる。ふたたび「赤ずきんちゃん気をつけて」のリフレインで暗転する。

3. あんよが上手な赤ずきん、トコトコすすむ森のなか

バスケットをもち赤い布の短いマントをはおる赤ずきん、赤



2. のたうちまわる赤ずきん



3. バスケットをもちトコトコすすむ赤ずきん

い尻尾とさめの鋭いあごをもつお猿さんに「あんよは上手、ころぶはお下手」とはやしたてられるが、バスケットを出すと猿が欲しがり形勢逆転、逃げるふりして赤ずきんはピストルをむける。「赤ずきんちゃんに気をつけて」のリフレインとともに場面が暗転。

4. スキップ楽しい赤ずきん、ぴよこびよこ進む森の奥

赤い長い布をまきつけた赤ずきん、森のなかをスキップするかたわらで、「気になる気になる」「赤ずきん 赤ずきん」「ざわざわ、ざわざわ」のリフレインの中を徘徊し、緑の布を首にたらしした先ほどまで赤ずきんだった男にたおされ、ふたたび「赤ずきんちゃん気をつけて」の声と共に場面が暗転。

5. 花つみ川原へ赤ずきん…泣いた赤鬼やっつけて得意満面赤ずきん…

赤い布をまとい颯爽と現われた赤ずきんが足をけ上げて登場。赤い布を舞台におとすその先に別の赤ずきんがいる。「泣き虫赤ずきん」の声と同時にえーんと泣き出す男の赤ずきん。うなりながら歩きだすその足もとに黒い色紙が置かれていく。やがて泣き虫赤ずきんは「わっはっは」と笑いだし、腰をおとしてはいまわる。「赤ずきんちゃん気をつけて」のリフレインとともにやや暗くなる。

6. 赤ずきんちゃん気をつけて 狼待ってるムコウ岸



白いお面を被り、角をはやした赤ずきんをふくめ、合わせて4人の赤ずきんが登場して背中あわせに立つ。面を付け角をはやした赤ずきんが、恐怖の趣でいると、背景の緑の画面に、狼が人の手で映る。赤ずきんの一人は、「狼なんかたべちゃうぞ」と元気、別の赤ずきんは、「わーいおおかみさ〜ん」と手をふる。もう一人の赤ずきんは恐怖におびえ舞台のはじに、そしてみな「赤ずきんちゃん気をつけて」のリフレイン。

発表2 母親のまなざし

二番目は、かなり即興性の高い『母親のまなざし』。手をかけた子供たちに反抗され無視される母が、絶望しそうになるが、ひょんなことからまた気をとりなおす物語。食卓で、夕飯の準備をすませ、息子と娘の帰りを待つ母の場面で幕があく。

配役：母、息子ノブ、娘ユキ、母の愛犬ヒロポン、母の友達主婦二人、レストランのボーイ、日吉駅の駅員
大道具：円いテーブルと椅子が数脚
小道具：お皿、コーヒーカップ等

1. 自宅、夕食をテーブルにならべて息子と娘の遅い帰りを待つエプロン姿の母



返らぬ子供達を思い愛犬ヒロポンにぐちをこぼしていると、ユキが帰るが、そっけなくつめたくあしらわれ、演劇の台本片手のノブは母に視線もむけずセリフに没頭。遅い帰りをなじっても、「じゃますんなよ」とつれない。演劇部の初主演に夢中のノブは「演劇と心中するんだ」と取り付くしまもなく、母の果てしないため息がつづく。

2. 自宅、ユキとノブの会話に入れない母



iPhoneの話で楽しげなふたりの会話で聞こえたYou tubeを、歯磨きと間違えた母は全く相手にされず、のけものにされ怒る母。「そんならもっと頭よくなれよ」とさらにきつい言葉をあびせられる。またも犬のヒロポンに救いをもとめる母、優しく応じるヒロポン。

3. 午後のレストラン、就職に楽勝した子供をもち勝ち誇る二人の母



大学入試では、東大に入ったノブで差をつけていたはずの母は、「就職って以外と簡単ね」というX大から伊藤忠に内定した息子をもつ横山夫人、Y大芸術学部からフジテレビのディレクターになる息子をもつ大野婦人との、冷ややかでいやみな会話に、東大の印哲（インド哲学）の大学院にいきたいノブのことで、がっかり来る母。あげくは見えをきってコーヒー代を自分で持ち、つめたいわねと、いいおいて一人先に帰る。

4. 自宅、娘のユキと息子との決定的な溝そしてヒロポンにまであいそをつかれる母



ノブのことでがっかりしバーゲンで買ったドレスで気を引こうとした娘にもそっけなくあしらわれ、普通の女の子、OLから安定した結婚をのぞむ母は、そんな生活はいやだと拒否される。ノブはノブで「みんな死んじやったよ」「なんて戦争はみにくいんだ」「何で直美は死ななきゃあならないんだと」と訳のわからぬせりふを言って嘆きもだえる。演劇なんか、世間じゃ何にもならないという母に、ノブは迫る。「世間とはな

んでしょうか」世間に後ろ指さされることを恐れる母に、「はっきりいいなさい、後ろ指指してくるのはあなたでしょ」「おかあさんてさびしいね」と。愛犬ヒロポンさえ今日は、母に嘔みつき、もうこんなうちいやと我が家を飛び出す母。



5. 日吉駅のそば、絶望でうろうろする母

暗転のなか、「実家はないし」、「〈単身赴任の〉パパは九州だし」、どうしよう。「飛び込んじゃおうかしら」「特快が通過します。黄色い線までおさがりください」の駅のアナウンス。車の入ってくる音。ボタンと倒れる音がする。

6. 日吉駅の医務室、意識を取り戻す母



「気がつきましたか？」と医務室で目がさめた母を覗き込む駅員。実は隣の人が飛びこんでしまったのである。明るい声で、いつもは30分で死体が片付くのに、今日は一時間もかかり迷

惑な話しですよ。」と語る手馴れた駅員。「日も暮れたし、家族の下に帰られたら」とうながされ家路につく母。

7. 自宅、ノブとユキとヒロボンの待つ家へ帰る母



友だちが55人いるユキと、10人しかいないノブが屈託なさそうに話しているところへ母が帰ると、ヒロボンも嬉しそう、何事もなかったように母を迎え、おなかがすいたご飯何するのと聞かれ、めんどくさいからピザをとることに。楽しそうにメニューを考える子供達。

発表3 泣いた赤鬼

三番目は、『泣いた赤鬼』で美しい音楽やふりのシンプルさとは対称的に、女子学生に声をかけられつきあう赤鬼の物語は複雑なストーリー展開。赤鬼は、女子学生と携帯をかわしミートソースを食べる仲。だが、その日大学からの帰りに、黒い服で黒い棒をもった男達に後をつけられ、優しい申し出に応じない彼らに、つい暴力をふるい何人も食べてしまい、人間になってしまったことに気づく。「赤鬼とつきあっているんだって」と友達にいわれ憤慨している彼女に、彼氏は赤鬼にその友達を喰ってもらえたと冗談をいい、彼女が「無理無理」と否定する。そんな二人の前を、通り過ぎる赤鬼は、いっこうに気づかれない。

配役：赤鬼、女子学生、赤鬼をおそう人間2名（せりふなし）、ナレーター1名

音楽担当：キーボードとリコーダー

大道具：二つの椅子

小道具：鬼を襲うときの黒い棒

1. 赤鬼と女子学生、メールを交換する

リコーダーの軽快でファンタジックな音楽にのりながら、「僕は赤鬼」というナレーションがはじまる。舞台の離れた位置におかれた二つの椅子に座り、互いに背中をむけながら、携帯をやっている。赤鬼は赤い布をマント風にはおる。赤鬼の待ち受け画面に、女子学生から「ねえねえ宿題なかった。教えてよ」とメール。うざったいと感じながらも返事を返す赤鬼。



2. 大学で赤鬼君と女子学生がであう



住宅街の家に鬼仲間と住む赤鬼君は坂を下りキャンパスにやってくる。花の茎のように細くて繊細な、ぶつかるだけでこわれそうな女子学生は、「ほんとうに宿題なかった?」と確かめる。「本当はないよ、僕が嘘ついたことある?」

3. 大学裏の Pasta 屋で早いお昼をとる二人

向き合って赤鬼は、ミートソース5人前を、女子学生は一人前たべる。「僕が食べるのをうれしそうに眺める」彼女は、「本当にたくさん食べるのね」とびっくり、それだけ食べたら自分も角が生えて赤鬼になってしまうかしらとくっつくくない。

4. 大学近くの花壇を踏む赤鬼



女子学生は、「しあわせそうにキャンパスにあるいていく」が、赤鬼は、人目のつかないところで、花壇にはいり、花を踏みつける。

5. 女子学生が、彼氏に赤鬼のことを話して嫉妬されたてんまつ顛末を友達に語る一人語り



冒頭にちょっと淋しい悲しいリコーダーの音色。彼女は、「体中まっかつかで、によきによき角がはえ毛がぐるぐるまいてる」赤鬼に、友だちがいないので、自分からはなしかけてしりあったという。そのことを彼氏にしたらやきもちやかれ、でも赤鬼なんだと説明すると、急に「赤鬼が人間の女に手をだすわけないし」と言うわけ。その彼氏の言葉を聞いて、腹がたった彼女は、「人間と赤鬼は違う生物なんだし、全然対象外でしょ」と、友だちに愚痴る。

6. 人間の男たちに襲われついに、彼らに暴力ふるい食べてしまう赤鬼



電車を降りて家にもどる道すがら黒い布を首からかぶった人間たちに黒い棒で襲われようとする。と赤鬼は、自分の広い家で一緒に寝転がって漫画でも読みませんかとお誘いをする。不吉で恐ろしい音楽がひびく。しかしやはり暴力に走る。互いにやりあい、「人間の腕を喰いちぎり足をひきちぎる」。阿鼻叫喚がつづく。しかしこれは彼らの望んだものに違いないと、人間たちを「僕のおなかのなかにお引越させた」。

7. トイレの前の洗面所で人間になってしまったと気づく赤鬼

「10人も人間を食べておなかを壊したに違いない」赤鬼は、赤い布のマントをすりおとし、人間になったことに気づく、でも冷静を心がける。その廊下では、女子学生と彼氏が「僕の話しでもりあがっている。」

8. 女子学生と彼氏の会話と、そして赤鬼



「ねえ聞いてよ、赤鬼君とつきあってるのなんて言われちゃって」と頭にきてる女子学生は、「いっくら心の広いあたしだって赤鬼とつきあうなんて話はないでしょ」といきまいてる。そのあげく「まったくあんな子食べられちゃえばいい」という。彼氏はなら赤鬼君にたべてもらえばいいというのだが、彼女は「そんなの無理無理、赤鬼くんなんて体が大きくて赤いだけでそんな度胸あるわけじゃない」という。二人の方へ「ゆっくりゆっくりでもカタツムリよりす早く、ゆっくりゆっくりでもてんとうむしよりはやく」赤鬼はきづかれずに歩き通りすぎる。

発表4 ちくしょう大歌舞伎 末広がり うさぎの戯れ

最後は『ちくしょう大歌舞伎 末広がり うさぎの戯れ』。全員が仮面を付け歌舞伎衣装まがいの紙の法被風の袖をまとして登場、拍子木つきの口上ではじまり、『白波五人男』を模した「美ら海(ちゅうらうみ)」の傘と見得をきる場面で終わる。圧巻はみながうさぎになっての乱舞である。うさぎの戯れが始まる前には、全員が体をあわせて寝そべり、頭と胴体、手と足をもった「人」を、全員が体をよせあいぐねらせながらつくるが、そこからたちあがり円い輪になると、「か〜ごめかごめいついつ出やる」の歌で一人が白シャツ姿になり、他も従い、白シャツ姿の乱舞が「うさぎのダンス」の歌で最高潮になる。

配役：全員特別な名前はなく、群舞集団劇として「美ら海7人男」から海中昆布、そしてうさぎへと変容し、最後はまた「美ら海7人男」や8人衆に。

道具：緑の長い布、歌舞伎風紙製手作り袖、「美ら海」の文字がペイントされた傘、お面

1. 「美ら海」7人男のみえと朗読



舞台には幅1メートル30センチ、長さ6メートルほどの緑の布が横長に幕がわりに舞台袖の二人によってつりあげられている。拍子木をもった「まいります」の口上と同時に、布がおとされる。そして拍子木の音。白い面と袖をつけ前壇に正座した3人、後に立つのは「美ら海」とかかれた傘をさし面をつけた後向きの4人。歌舞伎調で、白波5人男をもじった美ら海7人男たちは、「雪ノ下から山伏に、まずはここまでは落ちのびたが」「切っ先詰まる春の夜の鐘はななつか六浦川」「夜明けぬうちにとびごしの^{へさき}舳先を離れ船に乗り」「故郷をあとに三浦から三崎の沖をのりまわせば」と、ひとり



ひとりの朗誦^{ろうしょう}がつづく。最後は、「碇を切って七人とも 保津
奈のなわにかかろうか」で、みなが同時に見えをきる。

2. 静寂の後、傘も面も袖もすてさった青いパーカー姿の
全員がうごく



床に寝転ぶもの、スローモーションで這うもの、みなで円
を作るようで作らないような脈絡のなさそうな勝手な動きが
つづく。立ちあがるもの、中腰のものいろいろ。

3. やがて混沌からまとまりがでてくる



立ち上がるものがふえ、舞台上を片手を挙げて動くもの、
接触しながら個々のリズムで動いている。依然としてスローム
ーブメントではあるが、しばらくして最後に全員が、たちあが
って片手をあげており、円を描くかのよう。その輪の真ん中に、
ひとりがはいる。ただちに彼は背を曲げ猫背で沈み込むよう
な動き。円をつくる人たちも、背中をすぼめる。

4. 全員が動いてからだをあわせ、「人」文字をレタリング

やがて合図もなしに全員が少しづつ床に伏せ寝る、横にな
ったり体を曲げからだをすりあわせ、ゆるやかで無言のうご
きのまま、舞台には「人」という文字ができあがる。



5. 「かごめかごめ」



しばしの静寂のあと、人文字がくずれ、人が再び動きは
じめ青いパーカーを脱ぎ捨てた白シャツ姿の男をまんなかに、
他の全員が腕をくみ中腰で円く取り囲む。そして円の人たち
は立上がり回りはじめる。「かごめかごめ かごのなかのとり
はいついつでやる、夜明けの晩に鶴と亀が滑った 後ろの正
面だあれ」の歌を歌いながら。

6. しろうさぎたちの登場

歌が終わると同時に、中央の白シャツの男に、他の全員が
背を向けて円を描いてかこんでいる。ひとの背中を押して飛
び上がった男は、周りがかがみ無事に円からとびだす。する
と彼を追って他の人が囲んで円を描きそれをすぼめながら追
いかける。追いかけるこの進行中に、中央の男が青いパーカ
ーを脱ぎ捨て、円の外に飛び出す。ひとりまたひとりと白シャ
ツ姿になる。全員ぐるぐる回りするうちに白シャツうさぎばかり
となる。

7. うさぎのダンス

すると「タラッタラッタラッタうさぎのダンス、タラッタラッ

タラッタラッタラッタラ とんではねはねびよこびよこ踊る、
耳にはちまきラッタラッタラッタラ」の歌声とともに、不規則
だった動きにリズムができ一方向に円を描いて、全員が元気よ
くスキップ。



8. 美ら海八人衆のみえ

歌が終わると、掛け声「みななもの 碇をきって八人とも
保津奈の縄にかかろうか」と共に、全員が歌舞伎の派手なみ
えを、手と足と顔の表情を使って威勢よくきる。



それぞれのグループが、个性的にはじけて楽しんでいたこ
とが印象に残っているが、作品発表ののち、作者たちは大体、
その作品の意図や趣旨についてはみなさんのご想像に任せ
ますというコメントが多かった。発表と発表の間にもコメント
や質疑応答が活発にあり、二つ発表が終わった段階での休
憩時間には持ち寄った食べ物を囲んでの楽しい語らいがつ
づき、発表がすべて終わった後も、黒沢美香先生による一
つ一つの発表への丁寧なコメントをはじめ、その他見ていた
いただいた方や、参加者からも、こうした授業の過去の参加者
からも貴重な励みになる感想を寄せられ、なごやかななか
にお開きとなった。

発表作品を考察する

※振り返り会当日は授業のビデオを見ながら、作品解説と若
干の考察が行われた。

手塚 まず発表作品から感じたこととしては、一番最初は
本当だったらもうちょっとゆっくり皆さんと一緒に全部の作品
を振り返ってみたら、またいろいろな面白い感想が出てくる
かなと思ったんですが。皆さんそれぞれにとって大切なテー
マを取り上げていらっしゃるんだろうなと感じたことと、最後
はいろいろなことがあっても、海中昆布の踊りみたいなのが
あったりとか、それから赤鬼が人間に追い掛けられて食べち
やう場面なんかがあったじゃないですか。「母親のまなざし」
で言えば、私が散々子供たちや武藤先生演じる犬にかみつ
かれたり、傷つく場面とか葛藤する場面とかいろいろありま
すが最後はみんな落ち着いて終わっているかなという感じが
しました。

もうちょっと時間があれば、そういうものをみんなでもう
一度自分たちが発表した作品を見てみると、またそれはそれな
りに深い気付きがあるかもしれないけれども、そういうこと
をするのが、もしかしたらやほかもしれないなという思いも
持ちながら見ていました。

それから私自身が今回は配役をいただいたので、私にと
って面白かった部分は、やっぱり最初は恥とか照れとか自意
識過剰なのかもしれませんが、そういうところがあって、第6
回の黒沢先生がいらしたセッションのときには、なかなかう
まくできなくてどうなることかと思って、登校拒否になりそう
だったんです。ですが、何とか武藤先生に恥ずかしく思ったり
照れるのは人間と思うからだと言われまして、犬のヒロボン
からそう言われて少し景気を付けられまして、結構やってみ
たら、あのときは楽しかったかなと。でももう一度またやって
くださいというと、やっぱりまたもう一度、照れの克服が課
題になるかなという感じです。

お母さん役というのは、私はお母さんになったことがない
のですけれど、やっぱり自分と母親との関係や、妹と母親と
の関係、兄と母親との関係でいろいろな愚痴を長女なもので
聞かされていたんですね。そういうことからいろいろ思い出
しながら若い娘、息子役にいじめられて、少しこんちくしょ
うという感じで、作者の意図ではもうちょっとしゅんとなる役
だったと思うのですが、かえって自分自身の地が出ちゃって、
こんちくしょうみたいな感じになったんですけど、そうなった
場合にも、結構みんながサポートしてくださって何とかやれ
たかなという、とってもいい経験でした。

次に、考察としては、この授業の手法である、物語の書
き換え、作り変えや臨床心理学的アプローチについて、物
語の書き換え、作り替えという手法でおこなったんですけど、

皆さん結構自己表現したいという欲求とか、それを満足させられた部分も結構あったんじゃないかなと思って、このあたりは皆さんの感想を聞きたいと思いました。

若い皆さんですが、いろいろな願いとか、思い、葛藤、いろいろなものがみんなに受け止められる、共感されやすい形でうまく表現されていたんじゃないかなと思って、4つのグループとも、それぞれたぶんみんな違うテーマだけれども個性的ですごく面白かったと思います。

それからこのアプローチは、今回は臨床心理的なワークショップを一番最初に1回、2回やったので、それがその後どんな影響を後半に与えて促進、支援したのかなみたいなものは、ぜひ皆さんから伺ってみたいと思いました。

この授業は授業なので学びがあってほしいわけですけど、そのために満足度とか効果とか今後に向けて皆さんに振り返り、授業の評価をしていただいたわけですが、それに関しては、今回の皆さんのいろいろなご意見も聞いたりして、もうちょっと分析していく必要があるかなと思いました。

武藤 3つの部分にこの実験授業は分かれていたと思うんだけど、最初にこの菊住先生のワークショップがあって、授業で対自、自分に対する気付き、それから他人に対する気付きの問題、対自、対他のコミュニケーションの問題をやりました。

その後そこで授業のコンセプトとしては、そこである種の感性というか、感性が磨かれるといういろいろな敏感になった体と頭で言語作品を作ってくるのが第2部です。その言語作品を作ってから、今度はそれをアーティストの方々の助けを得て創造的な表現につなげるのが第3部で、この3つの部分がどのようにうまくつながったのか、あるいはつながっていなかったのか、皆さんの意見を聞きたいと思っています。

手塚 私も聞きたいところ。

武藤 私の好みからすると、それからこの教養言語力育成という大きなプログラムの趣旨からすると、皆さんが面白い物語を作ってくれたので、その後1回、それらを解釈し合うみたいな場があっても良かったと思います。それはもしかして野暮なことかもしれないんだけど、「笑う赤鬼」(P.14 掲載)で最後なぜ赤鬼さんは笑ったのかなとか、あれは泣くのではなくて笑うことでかえってインパクトが出ると思うんだけど、そういうところとか、ほかにもいっぱいありますけど、そういうところを解釈し合うというか、そういう時間もあったらいいかな、よかったかなとは思いました。

とにかく私が皆さんにお聞きしたいのは最初の部分、臨床心理学的な気付きの部分と、それを言語に作っていく、

言語の物語に作っていく部分、そして、それを最後に総合的な表現にまとめていく部分、この辺がどのように接続されたのか、されなかったのか。こういう接続は有効なのか、有効じゃないのか、その辺をお聞きしたいと思います。

手塚 ということで、横山先生の方から何か付け加えることはありますか。

横山 来年度からこの身体知関連の授業が教養研究センターの正規設置科目となります。内容はこの実験授業の内容がそのままスライドするわけじゃないですが、身体知関係の授業成果が実験授業を通して認められたわけです。今まで4回の実験授業を行ってきたんですが、毎年取られた方もこの中にいらっしやいますね。

正直言って、こういった授業を本当に履修してもらいたいという人たちに、ちゃんと情報を伝えることができていくのか問題ですが、同時に、知りたいのは、皆さんがこの授業を取って変わったかどうかを知りたいんですね。中にはもう学部生のときから取り続けて、社会人になられた方たちもいらっしやる。何らかの意味で、これがすべて先ほど武藤先生が言ったことともつながってくるんですが、教育的に意味があったのかどうかをうかがいたい。実験授業に戻ってくる皆さんは、何か自分にとって意味があるから出続けているんだと思います。

あとは、正規科目になると、単位がもらえますからおそらく履修する学生さんが増えると思われます。ただ単位だけのメリットではだめで、いろいろな意味でこの科目をどのような形でどのような意義のもとで開いていくべきなのかは大きなテーマなんです。

ですから履修者に何か自分が変わったことがあるのかどうかという自覚があるのなら、それがやはり次の学生さんたちにも訴えかける1つのポイントだと思うんです。そのことを知りたいということと、正規科目として、どのような形で学生さんたちに紹介していったらいいのか。そのことをぜひとも知りたいと思っています。

実験授業ゲスト講師より

言葉の前のコミュニケーションスキル

——研いだ“五感”と伝えたい思い

学生相談室 菊住 彰

身体知実験授業「体をひらく、言葉をひらく」では、第1回で普段意識することの少ない五感に意識を向け、第2回でコミュニケーションへの動機づけを高めることを狙いとして、授業を構成しました。

感覚を研ぎ澄ますことは、取り越し苦労をしてストレスいっぱい左脳を休ませる効果があり、多くの参加者の皆さんからは、ご自分では知らず知らずのうちに溜めこんでいたストレスを自覚するきっかけになったという内容の感想文をいただきました。

確かにストレスのセルフコントロールの方法をお伝えするワークショップでも、私は1回目と同様の内容を組むことがあるのですが、今回の身体知授業では、違った目的のためにこのレッスンを取り入れてみました。

実は五感を活性化することは、人間が本来持っているコミュニケーション欲求を高揚させ、対人関係を結ぶ動機づけを喚起することにもつながるのです。つまり1回目の授業は、2回目につなげるウォーミングアップでもあったわけです。

学生諸君にとってコミュニケーション能力といえば、他者と会話する勇気であったり、豊富なネタを持っていることであったり、場を和ませる力であったりということが想像されるようです。しかしそんな「話芸」を身につけて、人気者になろうということが、「体をひらく、言葉をひらく」の授業の本来の狙いではありません。話したい欲求は、まずそれを起こさせる外界の刺激を感じ取ることによって湧いてきます。陽だまりに出た時や、美味しいものを口に含んだ瞬間に、思わず言葉が口からこぼれるように。それが第1回の授業で体験していただいた数々のメニューの狙いです。嬉しいことに参加者の皆さんからは、視覚に頼らずに歩く体験中の新たな発見などについて、ユニークな感想をたくさん頂戴しました。

そして第2回。新たな感覚を得ることと、それを他者に面と向かって言葉にすることとの間には、もうひとつ越えなければならない壁があります。それを越える勇気を持っていただくことが2回目の狙いです。その勇気は、切磋琢磨して身につけるもの、ではないのです。美辞麗句をもって他者に感動を与える自信などでもありません。向き合って座れること、「あなたに伝えたいことがある私」や「あなたの話に興味を抱いている私」を瞳で示せることができればいい。そのことを理屈ではなく体験していただきたいかったのが、第2回でした。緊張感が急速に解けていく参加者の方々をたくさ



菊住 彰氏

ん目の当たりにできたことで、私にも皆さんのチカラを分けさせていただけたような幸福感が残りました。

相談室の面談が立て込み、3回目以降の授業に参加できなくなってしまい、その後の皆さんの実践力向上のプロセスをとともに過ごせなかったことが残念です。最終的な発表の様子は伺いました。溢れるオリジナリティに、皆さんの自分らしさへの自信を感じました。

PROFILE

きくずみ・あきら 臨床心理士。1961年生まれ。

新聞記者を約10年間務めた後、産休明けで職場復帰する妻に代わって退職し、専業主夫になる。その後、大学院で臨床心理学を学び、心理カウンセラーに。東京都健康推進財団心理相談員などを経て、現在は東京学芸大学特任准教授、大妻女子大などの非常勤講師のほか、慶應義塾大学学生相談室や三軒茶屋神経科心療内科クリニックのカウンセラーを兼務。

著書に『ストレス教室の開き方』（共著、保健同人社）、『介護のストレス解消法』（共著、中央法規出版）などがある。

「体をひらく、言葉をひらくーわたしたちの物語を紡ごうー」のワークショップ講師（第5回）をつとめて

黒沢美香

授業のテーマである、体と言葉にそれぞれひらくこと、その両者のダイナミックな相互作用について、体と言葉の親密性について、私の考えを書きます。

まず、二つの方向での動きがありますね。一つは言葉で身体を発掘する、いはば「言葉から身体」への動き。もう一つは身体から収集する言葉という視点での、「身体から言葉」への動きです。

1. 「言葉から身体」

内容の中で芯になる言葉を探す。その言葉をオマジナイに背骨にするには、その言葉を追いかけ追い越す。例えば「おはよう!」をしたければ「おはよう!」以上になれる形や速度を探す。「おはよう!」を踏む。しかし踏むのは容易ではなく、際まで追いかけないとどの言葉（意味）だって踏ませてはくれない。いつでも意味はそそり立って身体の邪魔をする。意味の向こう側にいくこと（意味を突き抜ける）が、身体表現ならではのおもしろみだと私は思う。狂人になれるよう覚悟して「おはよう!」にのぞむ。ここで邪魔するのは意外にも照れである。照れるのは詰めがあまいことが主に理由となる。やっと決定した「おはよう!」動きが、薄いか痩せているなら、まだ言葉が足りてないから照れる自己が出て、身体が濁る。自己など出す余裕を許さないほど「おはよう!」を全身で突き抜けなくては身体が意味に染まる。染まると身体は単に意味を説明する道具になってしまい身体も失速すれば、本来の「おはよう!」言葉も気高さを失う。興奮と間違え易いので落ち着くことである。また、落ち着き過ぎると冒険を失う。こうしていよいよ決定された「おはよう!」動きなのだが残念なことに永遠ではない。身体はすぐホコリがついて「おはよう!」動きは曇る。言葉はとどめられるが身体はとどまってくれない。だから言葉のコルセットで身体を絞めておく。

2. 「身体から言葉」

このまま1で決定された「おはよう!」動きを題材にさせていただきます。その動きは「おはよう!」の言葉以上か以下か。言葉以上であるなら幸いでここからが始まりです。どこがどのように「おはよう!」言葉以上なのか。その感触に潜って近い言葉を選びすぎる。どこに潜るのか「おはよう!」動きを体験した身体に尋ねる。言い換えれば身体に耳を澄ますということですが、それは海に潜るようだし森に入ることにも似ている。潜っても手ぶらで戻るが室の山に当たること

がある。室に当たった時は洗濯や部屋掃除をしたようにスッキリ輝く。仮に「野菜」と身体から聞いたとする。その見つけた言葉「野菜」が「おはよう!」のさらなる根拠になり、1.「言葉→身体」の身体に驚くほど還ってくる。つまり単に「おはよう!」だけではなく、「野菜」付きの「おはよう!」になるので青々しさが身体や言葉にくっついて身体も言葉も加速する。「おはよう!」が進化していくのです。ここで肝心なのは身体最優先で、後の言葉や効果を期待しないことです。考えている身体動きから得た言葉は考えた範囲の言葉でしかないからです。原動力の「おはよう!」言葉から始めたのに、「おはよう!」を忘れるなんてできるものではありません。しかし忘れれば忘れるほど1・2の往復がダイナミックになり、とんでもなくおもしろい相乗効果があります。

こうして1・2を繰り返して一つの作品がやっと育ちます。言葉と身体の往復運動あってこそ作品も自己も強化され、どちらか一つでは手薄と私は考えます。言葉は待ってくれますが身体は生き物なのでその動きは一過性です。身体をよび戻すには前述した言葉コルセットをきつくしたり新しいコ



黒沢 美香氏（右）



第6回 参加者の動きをみつめる黒沢先生

ルセットに替えます。別の言い方をするなら陽に当てて乾かしたり水でふやかして枯れないよう努めます。皆さんにはもっと汗をかくことをお勧めします。身体に知性が宿ります。機敏とかテクニックの意味ではありません。汗をかいて身体を運んでいけば、歩くことも立っていることにも在る襞や粒に気づかれるでしょう。その襞や粒に名前がないので言葉を当てはめていきます。こうして身体も言葉も両方が敏感になっていくのだと私は考えています。

PROFILE

くろさわ・みか 横浜生まれ。5歳から舞踊家の両親（黒沢輝夫、下田栄子）のもとでモダンダンスを習う。1982～85年NYに滞在。当時のNYダウントウン・ダンスシーンをリードする振付家の作品を踊り、国内外の公演に参加する傍ら、ジャドソン・グループの出来事に出会い、その痕跡を追いかける。帰国後は、「黒沢美香&ダンサーズ」と名乗り、異なるジャンルのアーティスト等と即興性を大前提とした作品の反復／連続上演を継続。

99年遅蒔きのソロデビュー『薔薇の人』シリーズを開始。別名活動として、03年無国籍民族舞踊の“風間るり子”、09年＜グループ2時間＞において郵便局に勤める“小石川道子”としてデビュー。舞踊コンクールで1位を5度受賞の他、新人賞、優秀賞、舞踊批評家協会賞、日本ダンスフォーラム賞など受賞。

<http://www.k5.dion.ne.jp/~kurosawa/>

授業参加者を交えた振り返りと意見交換

手塚 それでは、ここからは、オープンディスカッションで、あるいは今までの話で分かりにくかったところがあれば、それも含めて感想や質問を出していただきたいと思います。

中島（実験授業参加者・卒業生） 武藤先生のその3つが繋がったかどうかと、自分のやったことだけで言えば、あんまりうまくつなげられなかったのかなというところがあります。つまり、やる前からこうしたいというのは、最初から歌舞伎をやりたいというのが自分にあったのです。でも皆さんのアイデアを1つずつ、自分の中の筋にそれを足していくという形で、皆さんのアイデアを入れることができて、皆さんはゆらゆらしてくれて、それはとても面白いということと、そして面白くしようという点では、最後の実践の部分はすごくうまくいったと僕自身は思っているんですが、それ以前の気付きとか言語作品という点ではどうもいまひとつ。

それは自分自身の体験というレベルにとどまって、それをうまく全体にフィードバックできたかという点、いささかうまくつなげられてないかなという感があります。あとは僕はこの授業は出るのは初めてという感じでしたので、二つ目の取り続けているという感じではないですね。

手塚 そうでしたね。

中島 ただ、僕は教養研究センターの他の身体知関連の授業にも出させてもらっていて、そして社会人にもなってまたここに来て、なかなか面白いと思うのは、毎回だいたい似たようなメンバーになっていることは確かなんですが、初めて会う人とか、そうじゃない人たちも、たった数回の授業の中で何だかんだで最後にきちんと形になるものを個人レベルと、そして集団、全体レベルで作ることができるということです。今までこの人のこういうところは知らなかったなというところは、さらに深く見られるところもあります。それから、ある種ストレスの解消ですかね。なかなか日常生活で、たぶんみんながわーっと何かを作ろうというのはできないので、その点で、僕がここまで参加できることは非常にうれしかったですね。

手塚 どういう意味でストレスの解消になるのでしょうか。創作活動みたいなものをやれたということがストレスの解消だったのでしょうか、それとも他にないか。

中島 今回はそうですね、たぶん日常生活では使っていないような頭の部分を使えることであるとか、今回は授業の中でゼーゼーいっていましたが、なかなか僕も運動をしないたちなので、ああいうワークショップなどでみんなで一緒に体を動かしたり、そんなことができるのも、良いのかなと感じました。

手塚 ありがとうございました。ほかにどうでしょうか。

日吉（実験授業参加者・学部生） まず最初の質問ですけど、武藤先生が実験授業を3つに分けられていましたが、すみません、これはもう僕は最初からつなげる気がなくて、本当に趣旨を無視してしまってすみませんとしか言えないので、平謝りです。けれど、2つ目の正規の授業として開いていくため、続けていくためということで、これは別に冗談とかではなくてまじめに言うんですけど、まず1つは創作コンペをやるといいんじゃないかなと思います。授業最後の発表をコンペティションの形にする。今回の実験授業では順位をつけませんでしたけど、意外と学生というのは、僕自身も含めて子供です。順位をつけられると、本当にすごい燃えるんです。今回も順位などがあつたらきっと、絶対全面戦争になっていたと思います（笑）。あとは、これは凄く俗っぽくて嫌な話なんですけど、まじめな話で豪華賞品を出されたらかなりみんなまじめに頑張ると思うんです。

手塚 それはたとえばどのような賞品でしょうか。

日吉 それは別に何でもいいんですけど、本当にみんなが単純に欲しいと思いきうものを出すと。

手塚 とにかくインセンティブがあればということ。

日吉 そうです、インセンティブです。

手塚 その創作コンペにせよ、豪華賞品にせよ、何か授業から得られるインセンティブがもうちょっと必要だと。

日吉 あと、それからもう1つは、教員の方々が、まずはブ



手塚千鶴子氏

ロモーションをしてみるといいんじゃないかなという気がします。学生にプロモーションをするよりも、先生たちにこんな魅力的な授業をやっているのを、学生にどんどん知らせてくださいと、そうするとすごく効率がいいんじゃないかなと思います。

横山 身体知の実験授業を取り続けたことで何か変わったことがありますか。

手塚 この授業の意味を、自分にとってでよいのですが。

日吉 変わったことは、僕は秋の身体知の実験授業は去年参加して、あと夏の武藤先生と横山先生の実験授業「新しい文学教育」を去年と今年と参加しましたが、すごく意味はありました。まず人の輪が広がったというのがありますし、あと先生方の普段見られないぶっ壊れた姿とかを見て楽しかったです(笑)。

あとは結構いろいろなことをやらせてもらえるから、自分はこんなこともできるんだといういろいろな発見があったり、逆に自分はこれができないんだと、自分のできるものできないものが分かるというので、それが分かってすごくよかったなと思います。だから小説を書きたいという思いがあったのは、たぶん先生方のおかげだろうと僕は本当に思っています。それで今はすごく映画を作りたいんだろうなというのがあって今そのために行動していて、とにかく意味は本当に大きいので、そこはもう自信を持っていただいて全然問題ないと思います。

手塚 ありがとうございます。

大野(実験授業参加者・学部生) 最初に聞きたいことを先に言っておくんですけど、先ほど、授業の途中の過程では、そういうのが生かされたかもしれないというお話がありましたが、後から同じグループだった方にどういう生かしがあったのかなと思います。まず最初の武藤先生の質問なんですけど、1回目の最後に授業が終わった後に横山先生からフィードバックはされたんですが、1回目と2回目は何に生かされたかみたいな話があったと思うんですね。

手塚 武藤先生がお尋ねになったんです。

大野 どうだろうねみたいな感じがあったというのは、結構素直な感想なのかなと思っていて、個人的には2回目に出なかったので何とも言えないんですが。



武藤浩史氏

手塚 そうでしたか。

大野 ただ、逆にあえてどういうことかという、1回目の菊住先生のときに何も考えない中で何か想像してみるということがあったと思うんです。たとえば手の上に何が乗っているとか。あのときに自分の頭で考えがどんどん飛んでいて、普段全然考えないようなことがたくさん浮かんだので、自分の頭は考えたらもっと自由なんだなと思えたのです。これが、もしかしてこの表現をするに当たっての自由度に、寄与していたかもしれないなとは考えました。

あと、その次の正規授業についてですが、学生目線から言うと、シラバスうんぬんなんですが、すごい具体的なことを言うと、春学期の課題は何か理論的なことを調べてまとめるレポート、秋学期に、こういう形の実践でまとめる形にした方がいいかなと思います。やっぱり自分で能動的に何かこういうことの表現に関してまとめるという作業をやった上で、また活動に生かすと、全員一人一人がもっと参加できるのではないかと。今回だと発案者の方が主導になりがちで、ほかの方は結構受け身になっちゃうこともあると思いますが、その理論を踏んだ後で実践となると、自分たちの中での基盤もちょっとできた中で生かせるんじゃないかなと思いました。

神谷(実験授業参加者・一般参加) 私は社会人として外部から参加したんですが、2回目なんです。個人の性格にもよるのかもしれないですけども、結構人見知りが激しいので1回目のときはなかなか動けない。2回目でやっと半分できるという。だからこの授業に何回も参加することの意義というのは、そこにもあると思いました。

特に慶應という同じキーワードがないんです。大学が違いますから、その場合に、でも私のようにまるで外部で年齢も

違うしという人も必要だと思います。同じグループの学生さんがお洋服のことやいろいろなことを尋ねてくれるときとかに、そういうふうに思いました。

増田（実験授業参加者・講師） 私も本当に最初の授業のときから、次がいったいどうなるのかという、その新しいページがめくられるんだけど、そのページがどういうものが書いてあるのか分からない、そういうドキドキの楽しみが毎回あって、それで前の内容が生きたかどうかというような、そういう難しいことはどうでもよくて、要は今日は何をやるんだろうという、そういう期待感で毎回来たというのが正直なところなんです。

ですからどういうふうに振り返ったらいいのかと言われると逆に困っちゃって、本当に楽しくいい思いをさせていただいてありがたいということと、それから参加者が皆さんすごいですね。私は参加者の素晴らしさというか、これがまた学生さんでこれだけというのもびっくりしちゃうような学生さんがいっぱいいたし、本当に感心することばかりで私だけが本当にそういう感じで、感謝プラスアルファぐらいで自分自身はこの授業の中では役に立たなかったですね。

大崎（実験授業参加者・学部生） 後から振り返って、ここをもうちょっとやりたかったなというのは、前半の体を開くところと、物語を共有するところをもう少し時間をかけてやりたかったなと思いました。結構自分の感覚が変わったことに気付くまでに時間がかかりますし、あるいはそれを言語化するのもすごく難しくて、時間がかかる作業だと思うのです。他人の物語を自分でのみ込んで、それは拒絶するのかもしれないけど消化して、それを混ぜるという作業もすごく時間がかかる作業です。だからもっと前半のところに時間をかけたいなと感じました。

僕たちのところはダンス作品『ちくしょう大歌舞伎 末広がり うさぎの戯れ』だったのなんですけど、その場でみんなでやるわけですね。だからその場で他人の体とか、他人がどこに動いているかということまで、自分の体が開ければ、すごく理想的な状態だと思ったんですけど、僕自身はもう自分でやる作業でいっぱいになっちゃっていて、周りの人間が全然見えてなかった。周りの動きとかを感じ取れていなかったし、それはやっぱりすごく難しいというか、そこまで行き着くのはすごく難しいんだと思います。だから例えば、最終の発表の前にも、初回で行っていただいたようなこの手の感覚のワークショップとかを行うとか。

手塚 リラクゼーションみたいな。

大崎 対自的なコミュニケーションのワークショップとかを、毎回準備体操みたいな形で少しとりいれていくといいかなとも思いますね。あとはさっき言ったことともかかわるんですけど、僕も3回この身体知系のワークショップに参加させていただいているんですけど、自分が変わったのは分かるんですけど、やっぱりその年というか、その回、そのワークショップ、そのワークショップでは分からなくて、ずっと全体を通して見てみると、何か変わっているのが分かるので。

手塚 時間を経て。

大崎 はい。それが分かるためには毎回毎回きっちり言語化していくことも必要で、それを見ると、ああ、変わっているじゃんというのが分かるかなと思いました。

高杉（実験授業参加者・卒業生） 自分がこの質問とかに答えられるかどうか少し不安なんですけど、まず横山先生が質問として投げかけられた点についてなんですけど、自分がこの身体知系の実験授業のプロジェクトにかかわって、通算5回目（他の実験授業も含む）ぐらいになるとは思うんですが、その中で自分がかなりというか変わった部分があると思います。

僕の場合、この実験授業だけではなくて学外で昔からラボというまた別の場で身体表現的なことはやっていたんですね。ワークショップ的なことを自分で主催というか、自分たちで小さい子供たちにそういうのを一緒にやったり、あるいは自分たちで組織したり、そういったことも行っているんですが、この実験授業がそれと大きく違ったのは言語、それから物語にアクセスしていくことだと思います。

実際、声で語っていくことであったり、あるいは身体で上から下に教えるのではなくて、みんなでフラットな関係の中で触発し合うことだったり、そういった関係性というのは、ここの場で始まったのが初めてではないかと。やっぱりその比重が大きかったと思って、自分の中では、やっぱり物語というのを自分が作ることができるということを位置付けたことが大きかったです。

それまでは、自分が物語とかを言葉で表現したりということがあまりできるとは思えなかったんですけど、こういう場で、しかもみんなが温かく受け入れてくれる環境があったことで、こういうこともできる、こういうこともできるという感触、これは楽しいなということで1つ自信になりました。

逆にこういう身体知系の授業が正規の授業になるということで、どうアプローチしていけばいいのか、あるいはこの新しい人がいっぱい入ってくることによってどうなるのかは、本当に自分の中ではどう対応していけばいいのかに関しては、あまりイメージできないんです。ただ、自分としては、これだけ多様

なバックグラウンドを持っている人が長期的にかかわってきて、そういう環境自体が非常に興味深かったし、非常に刺激的だったので、そういう意味では新しいさらに多様な人が来て、どうなるか分からないけれども、自分が参加するかもしれないかは別として、面白いものになるんじゃないか、そういった希望を感じます。

それから今回の授業での1回目、2回目の菊住先生のワークショップは、自分の中でちょっとテクニカルな意味で非常

に生きていたと思います。日常生活の中のコミュニケーションにもちょっと生かしたりとかは、今もちょっとしていると思います。同じことを繰り返して言っているとか、相手の目の中に自分を探すというのは、これはちょっと難しいかもしれない、でもそういった小さいことから実践できることがあるので非常にためになりました。

新井（実験授業参加者・一般参加） 緊張で自分の順番が

身体知実験授業に参加して

牛込 宝之（慶應義塾大学文学部1年）

今回の実験授業では、個人による表現ではないグループ活動による表現について多くのことを学ばせてもらいました。もちろん、授業の初期では個々人がまずそれぞれの物語を用意してくるという点で、一人で作品を創りあげる訓練にもなりました。ただ、それ以降はグループ単位で作品を創りあげていったため、自分以外の方とのコミュニケーションが不可欠となりました。この点で、一人で作品を創るときとは違う難しさがありました。グループなので、アイデアにはあまり困りません。次々に面白いアイデアが出てきます。ですが、それゆえアイデア同士がぶつかりました。アイデアがぶつかるということは、人間同士がぶつかるということです。

それぞれの班には、グループ活動を仕切るリーダーがいるのですが、私の班ではそのリーダーが発表のための物語を書いていました。私の班の発表は、物語の朗読と、それに沿った演技で構成されます。発表のお話はもう彼一人に任せ、その演技・演出をどうするかをグループで話し合いました。ここで私は、彼が一度完成させた物語を、発表の場で破壊する方向で演出したいと提案したのですが、彼は完成したものを完成したまま発表したいと言っていました。私の意図としては、演技に即興性を持ち込むことで半ば無秩序な発表にしたいと考えていました。そうすれば、ウケを狙うことも簡単なので、観客の方にも笑っていただいて会場を一体化させることもできると思っていました。けれども、彼はウケを狙うことをせず、完成された物語を崩さずただ真剣に発表したかったようです。しかし、私はこの考えには賛成できませんでした。事前のシナリオに忠実になればなるほど、その発表には面白みがなくなり、観客との距離がどんどん離れていく気がしたからです。観客との断絶は、演技をする私自身の孤立を生み、これには耐えられないと感じたからです。

一方、即興性を発表に取り入れれば、観客とも積極的に絡むことも可能で、発表の不安定さにもユーモアの入り込む余地ができるため、会場に一体感が生まれ私が孤立することはありません。けれども、リーダーを含め私のグループ全体の意向としては、やはりシナリオ通りの発表を望んでいたようです。大げさですが、ここに私とグループとの間に断絶を感じました。そこで、少し悩みましたが、もう思い切ってグループの意向に完全に従うことにしました。私のやりたいこと一切を放棄し、ただ言われたように演じることに努めました。けれども、やけをおこしたわけではありません。そこまで言うならためしにやってみようという軽い気持ちでした。ですが、これが功を奏しました。暴れたい欲望を表現しないことで自己を表現しようとしたのですが、とても気持ちよく発表を終えることができたのです。ウケを狙うことも一切なく、ただひたすらに真面目にシナリオ通りに役を演じたのに、孤立感が全くありませんでした。グループから異分子が消えることで、統一感が出たためだと思います。評判も良く、素直に嬉しかったです。

こうした個人の中の葛藤をどう処理するか、この点を今回の実験授業で学ぶことができたように思います。やりたいことを思うようにやれない、これは辛いことではあるけれども、考え方ひとつでそこから解放されるということを実感できました。他者の意見を受け入れることは、口で言うほど易しくないことも分かりました。受け入れるよりも、まずためしに身を任せてみる、他者の意見を受け入れるかはその後決めればいいわけです。このことに気づかせてくれたため、この授業はかなり実りあるものでした。授業にも不満は全くありません。本当に楽しかったです。ありがとうございました。

どういふふうに戻ってくることに耐えられないです(笑)。私は人の前で話をするのがすごく苦手なので、この身体知の実験授業に参加することで、ちょっと自己肯定感を高めることができたのかなというのをまず感じています。これまで何回か実験授業には参加させていただいているんですが、こうして、ようやく話を皆さんの前でできるようになったかなとは思っています。これまでの実験授業は、どちらかというと自分の内面を見つめて、自分自身でそれを表現することに主眼が置かれていたと思うんですが、今回はグループワークを主とした実験授業になって、それは実際に演劇に参加させてもらったときに感じたんですが、楽しかったなというか、人と一緒に作業をすること自体が非常に楽しい、面白いことで、それがまた繰り返し授業全体としてやれることが、作業としては非常に面白いことだったと思います。

ただ、今日この振り返りのビデオ映像を見ていて思ったんですが、作品を発表するときにほかのグループの方たちというのが、皆さん前に出て発表した方たちのところに集まって作品を作られたと思いますが、私だけは自分がいた場所に留まったまま、なぜか自分の作品を発表することになってしまったという、非常に受け身な態勢で、その態勢がそのままずっと維持されたまま少ない人数でやらざるを得なかったので、例えばばーっとみんなで集まって、楽しそうに作業をしているグループが非常にうらやましくて、毎回寂しいなというか、人がいないぞみたいと感じました。

その人がいないことを埋めるために創作、即興の作品を発表しようとなったんですが、結局、何をやったらいいんだという皆さんの質問に答える形で、脚本みたいなものを作ることになってしまったので、実際に演技をしたときには、演技がすべて脚本に言葉に縛られていってしまう形を非常に感じたんですね。私が書き留めておいたものがなければ、もっと自由に動くことができたんじゃないのかなと。

手塚 そんな思いがするんですね。

新井 相手の動きに合わせていろいろなことを表現していくことができたんじゃないかなというのは非常に感じていました、言葉の双方向性というのでしょうか。中でやった作業の中で、色紙にいろいろな言葉を書くことになったんですが、あの言葉は自分で書いたり、家に持って帰って家族に書いてもらったりしたんですけども、それぞれを書き出すのが自分の中の言葉だけだと非常にバリエーションがないというか、単純な同じようなことしか残っていないんですが、休み時間にほかのグループの方たちが集まってきて、いろんな言葉を書き留めてくださるんですね、それが非常に面白くて。

私の赤ずきんのシーンからイメージを広げていって、いろ

いろ書いてくださったんですが、感じ方が皆さんそれぞれ違うんだなというのが分かって、その言葉は実際発表するときには、何度も読み上げられる言葉とか、そこにあってもあんまり読み上げられない、言語化されるのがちょっと恥ずかしいような言葉とかもあり、いろいろ面白い現象が起こっていました。振り返る中でもうちちょっとやりたかったなというのは、最初に皆さんがそれぞれ創作を発表したときに、それを味わう時間がなかったんですね。

手塚 そうなんですよ。もう発表の時間自体も制限した状態で、それぞれの作品を味わうなんていう時間は全然なかったですよ。

新井 そういう時間があつたら、もうちょっとほかの人の作品について、何か感じるものがあつたかなというのもあるし、その場でなくなってしまった作品についても、すごくもったいないし、また何かの機会で上演させる機会があるといいなあと思ったのです。

手塚 そうですよ。

小崎(実験授業参加者・大学院生) まず話し始める前に質問があればということだったので、2点くらい聞きたいんですけども、手塚先生は結構恥とか照れがあると授業中に何度もおっしゃっていたんですけど、僕自身あんまりそういうのを感じない性質なんです、皆さんどうだったのかなというのを聞いてみたいと思ったんですけども、どうでしたか。

手塚 感じた方、手を挙げてください。分かりますね。

小崎 僕自身は、自分が表現することがすごい楽しいと思うので、それは恥とか照れでも、重圧でもなくて、むしろ自分が解放されて出せる場という考え方をしていました。

手塚 そんな感じだったんですね。

小崎 その辺を感じ方が違う人たちがいるのかなと思いました。もう1点聞きたいのが「見守り」についてです。見守りというのは結構難しいことだと思うんです。技術的に先生方は、どういうことを意識して、その見守りを行っていたのか。

手塚 難しい質問ですね。

小崎 あるいは学習的な場の醸成ということで、どういうものを作ろうとしていたとか、あとはこうはならないようにしようと

注意していたことがあれば、教えていただきたいなと思います。

手塚 私だけではなくてたぶんほかのコーディネーターの先生も、それから高山先生もそうだと思いますけど、やっぱり私も含めて、みんながなるべくのびのびと表現できて、自由に意見交換も含めてコミュニケーションが成立するためにたとえばその場で誰かが傷ついている人はいないかとか、取り残されている人はいないかとか、あるいはいろいろなテーマや課題が出てきますが、そのなかで自分にとってつらいテーマが出てきちゃったりして、突然それに向き合わざるを得ないような場合も出てくるかと思うんですね。

だからそういうことが一人一人を完全に見ているわけじゃないですけど、うまくいっているかなと、やれているのかなと。あるいは、みんなが共同でやっていくときに、そのグループ、グループごとがうまくコミュニケーションができていっているのかなとか、リーダーが苦勞してないかなとか。あるいは作品を作っていくときにはいろいろな意見の違いもあると思うんです。その間でお互いにうまくコミュニケーションをしながら意見の違いなどがあつたときに、そういうものを乗り越えていっているのかな、どうなのかなみたいなことに多少気を配って、こぼれている人がいないようにという感じでしょうかね。うまく答えられているかどうか分かりませんが、横山先生どうですか。

横山 「見守り」がちゃんとできていたかどうかはなんともいえません。ただ私は身体知の授業は、ある点において危険なものだという実感があります。つまり自分の内面と向き合わざるを得ないわけで、感情のコントロールができないということがあると思っています。だから誰かが客観的にそれを見ていることは、やっぱり必要なことで、たぶん小崎君の場合は、そういった葛藤や苦しみが起こらずに自己に解放できたという幸せなパターンだと思います。

でもこういった授業で隠された、あるいは隠してきた自分と向き合わざるを得なくて、そこで起こった感情をコントロールできないことは大いにあります。それが後々大きな影響をその人にもまわりにも与えてしまうこともあると思っているんですね。そういう兆候というのは結構体の表現に出ちゃうので、そこのところを見守ってあげるのは必要だと思っているんです。

おそらく今まで授業を受けていて、そういうつらい過去にちょっと触れちゃったなと思う方もこの中にいらっしゃるんじゃないかと思います。完全には分からなくとも、分かっているあげようとする態度が、私たちコーディネーターにとって大切なのだと思っています。これが答えになっているかどうか分からないのですが。



小崎 ありがとうございます。見守りという言葉を見たときに、だいぶ前に僕が養護学校に教育実習の関係で行ったときに、その見守りというのが大事だということを教わったことがあったので、それでちょっと気になったので聞いてみました。

最初の質問があつたと思うので、そっちの方を答えていきたいと思うんですけど、まず授業の3点がつながったかということですが、一番最初の菊住先生の授業と次に来た物語を作るという部分が、僕にはどうもまったくつながらなかったというか、つながる気配というか、どこを取っ掛かりにつながるのがいまだに見えてない状態です。

菊住先生のお話自体はすごい興味深くて、普段生活とかでもためになるなというのは思いますが、それを言語表現というときに、自分がどう感じているのかを文章化することだとは思いますが、それはちょっと自分の中でうまく達成できなかったかなと思っております。

2番目の菱山先生とか黒沢先生のワークショップですけれども、これは非常によかったんですが、時間的に4グループがあつて、それぞれに作る時間が限られている中でのことだったので、逆にこちらはもっと一般化して、その発表するものにとらわれずにみんなで何かをやってみるという。そのやったことの中から何か各自で拾えるものを拾ってくるみたいな方が、それに深く集中できて僕自体はそっちの方が好みだったかなというのがあります。

実際に発表を終えてみて、僕自身はもう少しいろいろと細かく詰めていきかけたなという部分があるんです。もちろん即興性とか一発感というのも大事だとは思っていて、それと詰めていくというのは、ある意味、対極にあると思うんですよ。

手塚 バランス。

小崎 はい。ただ、今回の場合は3回、4回とある程度作り込んでくる時間が与えられていたので、もうちょっと作り込め

たらなというのがすごくありました。即興感と作り込みのバランスがうまく取れなくて、ちょっと中途半端な感じがしたかなと感じております。

2 番目の質問の何が変わったのか、得たものは何かという話なんですけれど、僕自身はこの実験授業は初めてなので、何回か通してということではないんですが、やってみて感じたのは、発表の場とか作っている場の雰囲気というのが、小学校とかでやったような学芸会であるとか、そういったものを結構彷彿とさせる感じがしました。

そういう小さいころに体験しているものを再び体験するか、あるいは体験しきれてない部分をさらに補充するという形で、自分の昔の時代にさかのぼって経験を補充したような感覚がしていて、それは小学生とか幼稚園児くらい柔軟では

ないかもしれないですが、これからの人生において血となり肉となり生きて、具体的にぱっと形に表れるものではないにせよ、生きてくるんじゃないかなと感じています。

最後の来年、身体知系の授業が正規化されるということで、学生をどうよんでくるのかという話なんですけれども、プロモーションをするという話がさっきあったと思いますが、それは僕も思っていて、授業自体は僕自身は好きですし、あるいはそうじゃなかったとしても、大卒のこんな感じの授業というのが大きく変わることはないというか、変えてしまったら別の授業になってしまうと思うんです。

この授業をある程度いいなと思ってくれる人をよんでくる方法を考えると、いろいろな興味がある人がいるので、その母数を増やしていくところが一番重要なと思います。もっと多

身体知実験授業に参加して

神谷 千景（2009 年度身体知実験授業参加者）

「わたしたちの物語を紡ごう。生きている私たち、一人ひとりの中に物語があります。」

確かにその通りです。

私はこれらの言葉に導かれるように、思わず、来往舎の扉を開けてしまいました。

そこには、色々な物語をもった人が集まっていました。一回目のワークショップが終わると、自分の感性が性格と同じように、いい加減である事が自覚でき、二回目では、いい加減なくせに人見知りの激しい私が、他者に自分自身を委ねることの楽しさを知りました。

これってもしかして、対自的、対他的コミュニケーションが取れたという事かしら。ウォ。

このワークショップのある 18 時 30 分から 20 時 30 分は、いつもなら疲れのでる時間帯なのに、先生たちのさすがの御指導、疲れのでる暇がありません。こうなってくると俄然好奇心が沸き、次が待ち遠しくなりました。

三回目、「おとぎ話」の書き換えでは、面白い話が沢山発表され、その中のいくつかには、心引かれました。自分自身も、子供の頃おとぎ話について、色々考えていた事を思い出しました。そのうえ、創作欲が刺激され、作舞できるおとぎ話はないか、舞の師匠と盛り上がりました。

四回目以降、グループワークショップに移っていくと、物語を作り変え、衣装や小道具を作り、演じ踊り、討議し、おやつを食べ、四方山話をし、作品を完成させ発表するという目標に向かい結束力も生まれ、仲間となっていきました。

5 回目は、やむなく参加できず。残念なことでした。

6 回目の黒沢先生の御指導は、皆と同じ動作をする事で、同じ型を繰り返すことで、ある感情を表現しました。自分でするのも他者の表現を見るのも興味深く、そしてまた、恐ろしくもありました。アーティストの力を感じました。

こうして最終回を迎えました。自分のグループの発表をしている時、他グループの作品発表を見ている時に感じたことは、おとぎ話にワクワクしていた頃、自分のスキルが身体知プラス α くらいしかなかった頃に戻れたような不思議な感覚でした。

素直にお互いを思いやる、あのやさしい穏やかな空気が流れていました。みなでつくった空気だともいえました。

私は、仲間と作り上げていくよりも、一人で完成させ、後から合わせるのが常だったのですが、このワークショップに参加して、仲間との協働作業によって作り上げていくのもまた、新たな境地を形成する事ができるのだと知ることができました。

自分のしている舞の世界では、型があり、それを第二の身体知のように体の中に入れ込み、そのうえで、個性をだすのです。地方（じかた）の人や観客とセッションするように間や場を協働していくのです。お互いに自律していないと作品は作り出せないのです。そんな舞の世界にいる私には、あらためて自分の欠点が見えたり、色々な物語を抱えた人達を知ったりすることによって、世界が広がりよい体験となりました。

くの学生たちに参加してもらうにはというこの場の現状を見ると、1つ言えるのがリピーターが多いことだと思うんですね。ということは1年目はあまり知られてないかもしれないけど、2年目リピーターをしてきたり、クチコミで広がったり、徐々に拡大していくようなものなのかなとは感じています。

あと、さらにそれを広げるとしたら、そのリピートをする人ではなくて逆にリピートをしない人が、何でこの授業は気に入らなかったのかに着目してあげると、だんだん見えてくるのかもしれない。僕自身のはっきりした意見ではなくて、着眼点の指摘にとどまるんですが、そういうふうに思っています。

あとは、社会人の方が結構いらっしゃる授業なので、僕自身はもう最初からこういう場だと思っていたので全然気になっていなかったんですが、学部1～2年生とかの学生からしてみれば、これはすごい、何だ、この場はというような場だと思うんです。

ただ、それというのは、逆に正規科目になると難しいのかもしれないんですけど、ほかの授業ではない部分で、いろいろな話が聞けたり、いろいろな考え方の人がいるんだというのが分かったりとか、学生ばかりの集まりから1歩外に出た、1歩外に出ないまでも外部から入ってきているような場として、非常に教育的にいいんじゃないかなと思っているので、卒業してから来ってくれる方々とか、社会人の方とかはありがたいと思っていました。

手塚 ありがとうございます。

牛込（実験授業参加者・学部生） 授業の3つの段階のつながり方という意味では、僕は対自的コミュニケーションと対他のコミュニケーションという、その対自的、対他のという言葉が気に入ってしまって、これはいいなと、こういうまとめ方はいいなと思って、それを念頭に置いたという意味ではつながっていました。

でも相手の目を見ながら話すと、そういう実践的な部分では、あまりつながらなかった気はしますが、対他のとか対自的という、そういう言葉というか概念みたいなものは、気にしながら授業を受けていました。対自的という自分が何をやりたいのかを自分で自覚する。それを相手に伝えるとか、そういうところは意外とやっていた気がします。

僕はグループ発表の中で赤鬼が人を食べるシーンで、実際にミカンを食べようと思ったんです。ミカンに水分が多いので、あれにむしゃぶりつくような食べ方をすれば、それこそ人間を食っているようなリアリティーが出るんじゃないかと思って、そういう案を言ったり、逆に同じグループの中からは、そのミカンを一方的に観客に食べさせたら、それこそ暴力の表現になるんじゃないかと言って2人で盛り上がったんですけど、一

方で結構顔をしかめられたりもしました。僕はいったん作り上げたものをめちゃくちゃにして收拾がつかなくなるような感じで発表したいなと思って、ずっとそれを推していたんです。

でも例えば赤鬼だってマントを着けているだけなので、逆にあのマントを着さえすれば、誰でも赤鬼になっちゃうので、みんなに赤鬼をやらせたいなと言ったんですけど、それでもずっと顔をしかめられたりして、その分、僕は黒沢先生のダンスのワークショップのところまでめちゃくちゃにしたものをやりたいと推していたんですが、結局、まとめようみたいな。

周りもそれをやっちゃうと收拾がつかなくなるからみたいな感じで、結局、俺のやりたいことは拒絶されているんだなと感じたりもしました。もう従っちゃえと思って、最後は周りの意見に乗って従って、あえて自分を表現しないというか、いろいろやりたい衝動を抑える感じの表現でやってみようかと思って。

手塚 そういうことで、逆をいったわけですね。

牛込 それをやりきったことで評判もよかったので、うまくいったよなという感じです。そういう意味では相手に合わせるのもいいかなと思いました。逆に赤鬼が人間に変わるという意見は僕の意見で、あれはずっと言っていたら取り入れてくれたんです。

手塚 そちらは自分の意見が通った。

牛込 逆にそういうのが功を奏したかなと思った。お互いに相手に合わせるというか、自分のやりたいことを言うだけ言って、でも相手とお互いに組み合うというか取り入れる。ある部分では引いて、ここは従ってみようかというところが学べた気がします。

この実験授業で変化できたことは、変化した部分はいまだに自覚はないんですが、結構人見知りな僕が人前で何かを発表したりとか、自分もこういうことができるんだという自分の側面を発見したというか、変化は期待できるかどうか分からないんですが、取りあえず何かを見つけたということ。自分にもやったら意外といけるんじゃないかという発見があったという、そういう意味での収穫はあったと思います。

学生の参加の方はほとんどがアカスキ（教養研究センターの正規設置授業「アカデミック・スキルズ」）の参加者だと思いますが、唯一かは分からないんですが僕はアカスキではなくて来ました。何で来たかという、こういう授業があることを知って、それでちょっと興味を持ったので、そういうこの授業の存在を知らせることができれば、興味のある人はいっぱいいると思うので、存在を知らせればいいんじゃないかと

思って、正規授業にしてシラバスに載っければもっと多くの人が集まるんじゃないかと思っていたんです。それが本当に来年からそうなるみたいなので、これは人が集まるんじゃないかと、僕はちょっと楽観的には思っています。

湊（実験授業参加者・一般参加） アカスキって何でしょうか。

牛込 「アカデミック・スキルズ」という授業があるんです。

湊 それの人とそれでない人というのは、そのコースを取っている人と取ってない学生さんが中にいるということですか。

手塚 たぶん。

牛込 どうも僕以外の学生さんは、ほとんどが「アカデミック・スキルズ」という授業に入っているらしいですよ。僕はその中に1人ひょっこり来ちゃったみたいな感じなんです。僕からすれば、アカスキって何という感じだったのでちょっと衝撃を受けました。

大野 でもそれはアカスキを受けていないといけないということではなくて、アカデミック・スキルズも教養研究センターの授業で、この実験授業も教養研究センター主催なので、重なっている先生がいますし、アカスキの中で先生がこの実験授業について発信したというだけだと思うんですね。だからおっしゃるように発信することが大事だったのと、私はアンケートにも書いたんですけど、アカデミック・スキルズもシラバスに載っているんですよ。ただ載るのはシラバスの最後の方なんです。たぶんこの授業もシラバス最後の方に載るはずですよ。実務的な問題ですけど、私は最後まで見る人の母数がもうちょっと増えればいいなと。

湊 さっき小学校のころの気分とか、そのときの自分の過ごしてきた体験とか、そのことがちょうどこの場にあらためて明示的に持ち出してもらってもいい気がするんですけども。

同じ学校とか、あるいは学ぶだとか、みんなで言い合っているような場所で、何でこんな質の違いがあるのかというと、それぞれにいろいろな制約や制限とかが小学校であれ、大学であれ、場面ではあると思うんだけど、興味とか関心とかわくわくしていく、おのずと内からわいてくるようなモチベーションというのかな、そういうのはどちらの場でもあり得るとは思うんだけど。

逆にとても窮屈になっている面があったり、ちょうど僕は今日話を聞いていてアカデミック・スキルズという言葉は、自分の中で浮かんではいったんだけど、それっていったい何

だろうかという、単なる切れ切れの知識の断片とか、あるいは既存の物事の筋道の体系とか、すでにもうこれまで積まれてきたそれを学んでいくばかりでは、せっかくの大学の意味がそれだけだととても惜しいことがあって、そこについて、そうではない面に対してみんなでダイブしていけるような、飛び込んでいけるような、そういうものを大学が用意していけたらいいと思うんですね。

僕自身は大学のスタッフでも何でもないんだけど、自分たちの世の中、社会の中には、そういう機会は大学という場では、ぜひ用意してってもらいたいという思いというか、そういう夢だったり、願いだったりがあります。

その意味で可能性とか自由度とか、それからいろいろな違った視点、まったく対峙し合うような違った意見をする人がいて、そういうものが同じ場に立ち会えるような場所となり、混沌だったり、ぶつかり合いだったり、葛藤だったり、そういうものも含めて扱えるような場所が最終的に深い意味でのアカデミック・スキルズや、この教養研究センターの身体知の授業になっていけたらいいと思います。

何分、世の中でもコミュニケーションのスタイルとか様式って、社会とか地域社会ごとには違うかもしれないし、文化によっても違ったりするけど、手塚先生がかかわっていらっしゃるような多文化間のことを含めて考えたら、例えば日本の中でもサブカルチャー同士がいろいろ接点を交わし合っている。そういう意味でも実際、自分自身、自分たちの身の回り自体は多文化だったし、1つのパラダイムだけではなくて物事を扱えるような、そういう深い意味での力というのかな、そういうのにかかわれるような、あるいはそれを試してみられるような場を提供できるすごく大事な授業になれるんじゃないかと感じています。

そういう意味でこの授業では何をどう応えるのが、あるいはどう動くのか、あるいはどう座っているのが期待される参加者の増加とか学生増加とか、そういうことに引っ張られないで一緒にいられるような、そういう場をどういうふうにつくっていきなり、ホールド（かかえる）していきなりするのかというのが、チャレンジングでとても大事ななだと思います。

先ほど出ていた見守りという言葉にもいろいろな意味であって、あることを面白く感じる人や、面白くなく感じる人や、これじゃ物足りない人や、これだとちょっともういっぱいいっぱいという人や、いろいろな感じ方がきつと誰しもあると思うんですね。

さっき恥ずかしく感じた人について問われたときにも、本当に一言でどっち、こっちってなかなか言い切れないところがあって、こういうことを言っちゃったら恥ずかしいという面もあるし、あるいはこの顔触れだから安心して言える、ある

いはちょっとおっかないけどやってみられる面もあるし、そういうあいまいさだったり、はっきり今すぐに結論付けてしまえないようなそういうところがたくさんあると思います。

あるいはまだもうちょっとじっくり味わっていたかったり、言葉にする前の言葉にあるいはなってくる過程を待てるような、そういう意味でのスペースというのを、この身体知の授業ではすごく大事にしていてもらえたらいいなと思いました。先ほど出ていた間も含めて、ちょっとこういう形でも応えていたらと思いました。ありがとうございます。

手塚 ありがとうございます。最後に、高山先生と熊倉先生と坂倉先生からコメントをお願いできますか。

熊倉（身体知プロジェクトメンバー） 熊倉です。初めてお目にかかる方もおられるかと思いますが、本当は初めてではなくて、本来は手塚さんと一緒にコーディネーターとして授業のアイデアを考えて、横山さん、武藤さんと含めて主催者側であるはずだった人間なんですけれども、ちょっと体調を崩してしまって完全にそれが不可能になり、今回初めて伺って本当に申し訳なく思っています。皆さんの話を聞いてすごく楽しそうだったなと、僕も参加をしたかったなと思いました。これは個人的な感想なんですけど、実は今回来る前にDVDを送ってもらって、手塚さんのお母さんと子供たちのやりとりを見てすごいなと思って、手塚さんとは何年もお付き合いがありますがこんな手塚さんを初めて見たと思って、思わず手塚さんをさらに好きになってしまったんですけど（笑）。

手塚 恥ずかしいですね。

熊倉 さっきの恥じらいとか、さっきの恥を脱ぎ捨てた手塚さんというのは。

手塚 あの場合はね（笑）。

熊倉 いいショックでした。あと皆さんの今のお話を聞いていて、ちょっとアイデアとして思ったのは、あれを全部はちょっと無理かもしれないんですけど、結局、今は教員がアイデアを出して授業をつくっているんですけど、授業のアイデア自体も学生さんというか参加者の皆さんと一緒に作ったら面白いなと思いました。たぶん今この場も絶対それに入っているわけで、だから来年度に向けて皆さんの意見を聞いてどうしようかという場だと思うので、単に授業を受けるだけではなくて、この授業のアイデア自体もみんなで出し合って進めても面白いかもしれないなと思いました。

高山（身体知実験授業協力者・理工学部准教授） 高山です。私は先生方ともこの授業に参加して下さった皆さんとも、ちょっと違ったスタンスでこの授業にかかわらないといけなくて、特に最初の2回は本当に横山先生がおっしゃっていた通りなんですね。

いろいろなものを解放することは、自分自身の能力、出したかったけど出せなかったものを出せるということは、とても気持ちがいいというか、いろいろ面白い、ぞくぞくわくわくするようなこともある反面で、自分の見たくなかったことや、気付きたくなかったことや、そういうことも出てくる可能性もあるんです。面白い創作でも解放であっても、そういった危険性もあることもあって、そういった部分をコントロールできるよう、主催する側の責任として、きちんと皆を守る、皆が動けるということをしなさいといけない立場を担っていました。

そういう形で見てきたのということと、あともう1つ私自身がここで役割として担っていたのが授業評価をすることもあって、それを本当に客観的に見ないといけないので、授業の中に観察者としていて、皆さんにすごく違和感を与える存在ではないかと思っていたんですが、その中からコーディネーターの先生方が本当に熱い議論をされて、今までの経験を踏まえていて、一人一人の学生さんのことを本当によく見ているんですね。

その中で一人一人の学生のために何ができるかということを経験を毎回すごく議論をされていて、そこでつくり上げられた授業



熊倉敬聡氏

がこの授業です。でもそこでいろいろな戸惑いを先生方もお持ちで、それが先生方の意図したようにここでできているのかも知りたかったし、それとは別に皆さんがもっと自由に動いているわけで、私が意図しなかったことを皆さんが経験する可能性も十分あって、実際にそれが起きていて、それも私は見ておきたかったというのがあって、いろいろな思いでこの授業の中にいたんです。そういうことをやりつつ、でも実際にはもうちょっと素の自分になって、皆さんがやられていること、かわかっていくことに本当にもう少女のように楽しんだり、心配になったり、自分自身もワークに参加させていただいたりなんていう形も取りながらいさせてもらいました。

今日のこの場も皆さんが自分がやったことの振り返りになっていてくれればとてもありがたいな、いいなと思う反面、実は少し食欲過ぎるかなと思うんですが、よりよくするためにはどうすればいいのかということにもつなげていきたいと思うのも実はあって、皆さんの話を伺って本当にいろいろなヒントを、一人一人の皆さんの言葉に、あっ、これはこういうことに生きるかもしれないという言葉をいただけたことは、本当にうれしく思っています。

私自身は、ちょっと個人的には来年度から日本を少し離れるので、直接ここにはかかわれなくなってくるんですが、気持ちの上ではつながっていると実は勝手に思っていますし、来年度正規になっていくときによりよい授業になるよう、私にできることは、海外にいる間にもございまして、向こうに行ってからもかかわらせていただきたいなと思っています。3カ月間、皆さん本当にありがとうございました。私自身も良い経験をさせていただきました。

坂倉（教養研究センター所員） 手塚先生をはじめ皆さん本当にお疲れさまでした。今日初めてこの授業のことをDVDなどを見ながら、どんな授業だったのかを伺わせていただいたんですが本当に楽しそうでした、6回か7回、これは1回当たり何時間だったんでしょうか。

手塚 だいたい2時間ちょっとでしょうか。

横山 もっとかかったと思います。6時半から始めて、終わるのが9時半ぐらい。やっぱり今日と同じぐらいなので。

坂倉 本当に非常に大きな時間が流れたんだろうなということがDVDからも伝わってきて、これが来年正規の授業になる、そういったときにそれがさらによくなっていくのか、あるいはその実験ではなく正規授業という条件がどういうふうに影響するのか、そんなことも想像しながら見ていました。プログラムの的には本当に参加された方は、そんなことを聞いた



高山緑氏

くないと思いますが、非常に何というか組み立てられていて皆さんがここへ出て、ある意味、自然に入っていくやすいような設計がされているんだろうなと感じました。

感想を言いづらいところがあって、いい悪いではなくて何と比べるかということが、ちょっと気になっていて、当然普通の授業を一般の大学の中の授業と比較で言えば、手塚先生がまとめていらしたように知識だけを扱うわけではない、技術だけを扱うわけではないというところで非常に特徴のある授業で、こういう授業はたくさん増えていくべきだと私も思っています。

一方で、いわゆる普通のワークショップと比べたときに、あるいはグループや感受性のトレーニングといった本当に集中型のワークショップ、グループなどと比べた場合には、やっぱりどうしても気になってしまうのは教室っぽさは非常に残っているなというのが気になっています。

その教室っぽさがある程度残った上で、そこで体とか表現というのが乗っかっていて、何かもっといけるんじゃないかなという、ちょっと遠慮している感じがある。もちろん現場の皆さんの雰囲気からは、また違ったんだと思うんですが、映像だけ拝見させていただいた私にとっては、そういうのが少しだけ感じるところがありました。

僕が授業をするときには、教室というのは本当にやりづらいなと思っているんです。教室って自己表現をする際には、すごく危険だなと感じています。教室というのは、何かこう1人で一方的に表現したときに誰も救ってくれないというのが普通の一般的な教室だと思うんですね。

そのいわゆる教室っぽさ、誰も一人一人の存在を認められてないという状態で表現というのはなかなか始まらなくて、そ

のベースのベーシックな部分でやっぱりグループをつくって、誰かが何かをやったときに必ずそれをほかの人が、先生だけではなくてほかの参加者が見合えるような、そういう授業をつくりたいないつも感じていましたので、特にその辺のところが逆に何度も参加されている方がいるというのは非常に心強いことではないかと私は思いました。そのクラスの中の何人かでも、そういうロールを分かっている方、ほかの人の本当に話を聞いたり、ケアをし合える、そういう文化が蓄積されていくといいんじゃないかなということを思っていました。

武藤 皆さん、どうもいろいろご意見をありがとうございました。今後の参考にさせていただきたいと思います。今年度は手塚先生を中心にこの授業を組ませていただきました。手塚先生、どうもありがとうございました。

<ちょうど横山先生の携帯電話がかかる>

横山 今、電話をかけてこられたのは横浜の寿地区のNPOの方なんです。来年度からは寿地区に学生が出向いて物語を紡ぎ出すという授業を始めます。

武藤 今の話の流れで言うと、さっき見守りという話があったんだけど、その寿町のNPO法人の「さなぎ達」というグループが、見守りプロジェクトというのをやっています。これは何かというと、やはり独居老人の方々にボランティアた

ちが時々訪ねて、いろいろ必要なことをするということなんだけれども、その中の大きな部分として、話し相手をします。さなぎ達の理事長である山中先生というお医者さんのお話なんです、やはり死が近づくと人は必ずおしゃべりになる。よく話すようになるそうです。

手塚 語りたくなる。

武藤 ということで、やはり語りと、自己と、人生ということというのはつながっているんですね。そういう語りというものを学生たちが、そういう独居老人のお話を聞いて、それをどうするのかというか、コミュニケーションを取りながら、そのいただいた言葉をどうするのが授業のテーマになります。ですからそれは個人の課題であるとともに、おそらくは、それは日本の戦後の歴史とも絡んでくると思うんですけども。

横山 ちょうど2月3日の6時半に、それこそアカデミックススキルズをいつも行っている部屋で、この山中修先生と、あと実際に見守りをやっていらっしゃるNPO「さなぎ達」の職員の川崎泉子さん、まだお若い方で、彼女自身大学生のときにこの見守りに参加して、そのまま今この「さなぎ達」に勤めているという、そのお二人のお話があります。ぜひいらしてください。

武藤 それから来年、正規授業化するという話がありましたけれども、あれは夏に集中してやろうと思っています。夏の集中授業というと、今まで文学の実験授業にありまして、これも身体知系のものだったんですが、それは正規授業でやろうと思います。来年、履修案内の後ろの方にきっと載っていると思いますので、どうぞ。

さて、2010年度秋にやる授業については、みんなと相談してちょっと考えようと思いますので、さあ、どういう展開になるか、また新たな展開があるはずですよ。来年も期待してください。そういうことで、今年はこれで振り返りが終わります。皆さん、どうもありがとうございました。

手塚 どうもありがとうございました。ご苦労さまでした。



坂倉杏氏

2009 年身体知実験授業の感想

日吉 信貴（慶應義塾大学経済学部4年）

この授業の最も誇るべきところは参加者の多様性であろう。大学教員、現役の若い学生だけでなく、義塾のOB、通信課程のマダム、付属校教員、さらには塾外の社会人の方など、教室に集まった人々の背景は実に様々である。年齢の幅も広く、一番下はまだ二十歳前で、一番上は還暦を越えている。だが一度授業が始まってしまえば、個々人が日頃背負っている役割は等閑視され、学生も教員も社会人も対等な立場に立ち、時に意見を衝突させながら、共に作品を作り上げていく。恐らくこんな経験はそうそう出来るものではない。そもそもこれほどまでに多種多様な背景の人々が集まることは通常では考えられないし、さらに何よりも、個々人の背負っている背景が無効化されてしまうということも、日常においてはまずあり得ないであろう。今回参加者は四つのグループに分かれて、最終日の創作発表会へと向けてパフォーマンスを洗練させていったわけだが、私たちのグループの芝居も、この実験授業という環境なしには決して実現しなかった。私たちのグループの構成員は手塚千鶴子教授、武藤浩史教授、横山千晶教授のコーディネーター・トリオ、及び文学部三年生の大野幸子と経済学部四年の日吉信貴の計五人。コーディネーター全員参加という実に奇妙な組み合わせが実現されるきっかけとなったのは私のワガママであった。短編小説執筆のために温めていたストーリーをこの機会に演劇化したい。そんな気持ちで私は実験授業に参加し、キャスティングをかなり早い段階で、勝手に頭の中で決めてしまっていた。手塚先生に母親役をやらせたらとても良い味が出そうだが、武藤先生以上に犬を演じるのに長けている者などいるはずがない、横山先生が手塚先生に意地悪をしている様は絶対に絵になる。そんな気持ちで、気がつけば私は先生方に、自分の演劇に出演して欲しいと何のためらいもなく依頼していたのだった。この三人の先生方が実験授業のコーディネーターであり、さらに武藤先生、横山先生が、毎週とあるゼミ形式の授業で自分を厳しく指導して下さっている畏れ多き師匠であるという重大な事実を完全に忘却した状態で…。今振り返ってみると当然のことのようと思われるが、私の熱い想いとは裏腹に、先生方はかなり戸惑っていらしたし、俳優をやることに対して乗り気ではなかった。だが、私は強引にこの案を通し、無理やり先生方を巻き込んでしまった。それが可能となるところにまさにこの授業

の凄さが現れているが、キャスティングが決まった後に起こったことはさらに驚異的である。実はこのメンバーで芝居をするにあたって、私には一つだけ心配事があった。それは手塚先生の羞恥心である。武藤先生、横山先生は最初は乗り気でなかったものの、この二方の演技力の驚くほどの高さを私はよく知っていた。二つ返事で私のグループへの参加を承諾してくれた友人の大野さんも、ステージに立ったときに物怖じするような人では決してない。だが、予想通り手塚先生は違った。手塚先生は人前でパフォーマンスをするのに対して照れを感じてしまっているようで、始めのうちは動きが非常に硬かった。そこで、今振り返ってみるとなんと恐れ多いことだが、私と大野さんの学生コンビによって手塚先生に対して演技指導がなされることになった。指導の厳しさのためか、一時手塚先生は私たちに脅えているようであったが、訓練の甲斐あって創作発表の日には照れのない実に素晴らしい演技を見せてくれた。武藤先生、横山先生、大野さんの演技も、私の当初の予想の遥かに上をいっていて素晴しかったが、今回の実験授業において私が何よりも感動したのは手塚先生の成長であった。授業には参加しなかったものの、創作発表会を録画した映像を見た教員の一人が「手塚先生とは長い付き合いだけれども、あんなにかわいい手塚先生は今までに見たことがなかった」とうれしそうに顔を語ってくれていたが、それを聞いて私はとても言葉には出来ないほどの喜びを感じたものだった。様々な人が集まり、お互いの背景を忘れて共に成長することが出来る。時には若い学生が自分よりもずっと年上の教師を鞭打ち、そしてそのことによって教師が自分の中に新たな自分を発見していく。そんな経験を可能にする空間が果たして今の日本にどれほど存在するだろうか。きっとこの実験授業以外にはほとんど皆無であろう。だが、このような経験は学生にとっても教師にとってもそれ以外の人々にとっても必ずや大きな財産になるに違いない。この実験授業が一つのモデルとなり、同じような講座が他の多くの教育機関で行われるようになることを私は強く願っている。

慶應義塾大学教養研究センター

2009 年度基盤研究 身体知プロジェクト
研究会報告「体をひらく、言葉をひらく——わたしたちの物語を紡ごう——」
— 2009 年度の身体知実験授業を振り返って—

2010 年 10 月 29 日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 不破有理

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1
TEL 045-563-1111 (代表)
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2010 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。
ISSN 1880-3628
ISBN 978-4-903248-33-2